

定義は飽く迄此の要素に依頼してゐる。マルクスが需要供給の關係を態と思ひ切つて排すれば、ラッサールは彼の定義を以て又此の個人主義的國民經濟の特効藥を移入する。』(註二)そしてジューベルや、メーリング等の御多聞に洩れず、マイヤーも之をラッサールの有名な五百萬エルの絹布の例に依つて證明し、彼等と同様に夫から同じ結論を引き出してゐる。曰はく『當該商品に對する需要の抽出こそは、マルクスの價值論に社會主義的性質を賦與したものである。然るにラッサールは商品の價值は正しく需要の動搖に左右せられるとして、識らずく、完全に資本主義的經濟秩序を基礎として自由主義經濟學者に左胆したのである』(註三)

(註一) グスターフ・マイヤー前掲同書一〇三—一〇四頁

(註二) 同一〇五—一〇六頁

その結果、ラッサールの社會主義的推斷は夫が彼の價值論から演釋せられたものである限りに於て、此の價值論そのものとは甚だしく矛盾するに至る。例へば、

斯くては、ラッサールがその價值説から如何にして労働者の完全なる労働收益に對する權利及び企業家利得の違法性を演釋するのであるか解するを得ない。『何故ならば、交換經濟的に組織された國民經濟内に於ては企業家階級が常に欠ぐ可からざるものである許りでなく、剩へ直接に初めて價值を作出するものなる事は實にその價值論當然の歸結であらうからである。現代に於ける企業家は消費と生産の無規律なる混沌の中へ秩序を齎さうと努め、既存の財貨貯藏量と欲望充足に必要な財貨量とを比較し夫に應じて生産に量的、質的方針を與ゆる底の要素である。企業家は市況を研究してその生産的活動を全體の欲望に従屬せしめる。勿論彼は之を無償とする理由はない。財貨の賣却の際に彼の有に歸する生産費用以上の餘利即ち企業利得は、故に、今日の事情の下では充分正當である。若し労働者が嚮導なく、世界市場の法則を熟知せずして、世界市場目當に漫然と生産するならば、その労働は殆ど決して價值作出的労働でないであらう』(註)

(註) ガスターフ・マイヤー前掲書一〇六一—一〇七頁

つまりマイヤーのこの記述は完全に彼が屢々引用した『ドイツ社會民主主義の歴史と學說』の著者メーリングの所論に依るものである。

最後に吾人はランペルト・オットー・ブラントの論文『フェルヂナンド・ラッサールの社會經濟的見解と實際的提案』(註)に於ても同一の意見に接する。

(註) エル・オー・ブラント『フェルヂナンド・ラッサールの社會經濟的見解と實際的提案』イエナ、一八九五年、五〇頁

そして吾々が初めに引用した著者達は當時未だ彼等の代表せる見解は何等かの證明に由つて確立する義務ありと信じたが、エル・オー・ブラントに至つては夫を最早全く無用の沙汰と考へた。彼は既に久しく確立せる事實を確説すれば足りた。そして實際、マルクスとラッサールとの價值論の差異を社會的に必要なる労働概念の異つた觀方に歸着せしむる見解は、マルクス價值論の敵からも味方から

も、信奉者からも反對者からも一樣に採用された位に普及してゐた。

従つて例へば社會主義の雜誌『未來』に於ても、偶々フランツ・メーリングの著書『獨逸社會民主主義の歴史と學說』の批評に際してマルクス價值論の信奉者たるその批評家の次の如き評言が載せられた。『ラッサール始めマルクスの他の門下達はマルクスの解する『社會的に必要なる労働時間』概念……(茲にマルクスの社會的に必要なる労働の定義が續く)……に猶ほ次の如き意味を附加した。即ち社會の實際の欲望を充すに必要なる一定量の生産物を供給するに必要なる労働時間なる意味を附加した。その差違は明白である。併し斯の如き解釋は少くとも、夫が資本論にて展開せられてゐる限りマルクスの價值論とは何等の縁りもないものである』。(註)

(註) 社會主義的評論『未來』ベルリン・一八七七年、九四頁附録、

そして右の批評家の斯の如き評言に由つて、『未來』の編輯者も亦通説に同意で

ある事が偶々明かになつた。(註)

(註) 同前、一一三頁

斯くてマルクス價值論の信奉者の大部分のものは、その反對者と共に、ラッサールはマルクスから借りた社會的に必要なる労働概念に誤つた解釋を與へたと云ふ見解を等しく抱懷してゐた。併し彼等は夫が爲に、マルクスの反對者が之に依つて下した結論迄分たねばならぬとは一寸も考へなかつた。そして夫は尤もな事であつた。ラッサールの社會的に必要なる労働概念の定義とマルクスの定義との乖離、而も上述の意味に於ける乖離の事實そのものはマルクスの反對者が夫に由つて下した結論とは何等の關係もない事である。何故かと云へば、是等マルクスの反對者が、人間社會の質的及び量的欲望に適合する意味に於て合目的に爲される労働としての價值構成的労働の定義に基づいて常に手足労働のみならず、頭腦労働も、常に生理的なるのみならず、精神的なる労働も生産的である事を證明

せんとする以上、彼等の努力は全然徒勞であつたからである。何故なれば、マルクスもラッサールも企業の指導てふ精神的労働を輕視することはなかつた、そして何方にしても斯の如き労働の辨償に對する要求を何とか争ふが如きは思ひもよらなかつた。夫所か兩者ともマルクスもラッサールも斯の如き労働を夫が、労働者と生産手段の所有者との對立に依存せず、社會的労働行程の本質そのものから出發する以上、價值構成的労働と呼んだ。併し宛も夫故に彼等は、労働者の物理的労働に對する給料支拂と同じく、生産の指導者としての企業家に由つて實行された精神的労働に對する報償も勞賃の中に加へ企業利得には入れなかつた。マルクスは明瞭に斯ふ云ふ事を指摘して、企業利得を監督賃として表はすと云ふ事は一部は『實際利潤の一部分が勞賃として分離せられ得るし、現實に分離せられると云ふ事、換言すれば、寧ろ反對に勞賃の一部分が資本主義的生産方法に基づき、利潤の主要成分として現はれる事』に依存すると云つてゐる。(註二)斯の如き

資本家所得の一部分は併し所謂企業家利得とは何等の關係もない、従つて企業家利得とは獨立に、夫とは引き離して現はされ得る、『而も、夫の擴張等とは支配人に對して特別の賃銀を與ゆるに充分なる勞働の分割を許容するが如き業務部門に於ける支配人の俸給として現はされる』(註二)。然るにラッサールも明に斯ふ述べてゐる、即ち彼に於ても此の部分の企業家所得は當該企業の支配人としての企業家に由つて給附せられた勞働に對する報酬を表はすものなるが故に、彼の『所謂資本利潤』の『中に含まれてゐない』(註三)と。そして實際ラッサールはその著『既得權の體系』中に於て資本利潤を定義して、『生産物の賣却價格と勞賃及び總ての、何等かの仕方て該生産物の成立に貢献した精神的勞働の報償の和との差額より成る』と云つてゐる。勿論斯の如き精神的勞働は企業家自ら給付すると或は彼が使用せる精神的勞働者が給付するとは問ふ所でない。

従つて、斯の如き精神的勞働がそして殊に企業家の指導的勞働自體が價值を構成するか否かは——從來誰一人問題にしなかつたが——重要でない、又企業家が嚮導的に與へた精神的勞働に對して報償を要求する權利があるかどうか——之はマルクスもラッサールも承認したが——重要ではない。問題は唯全企業所得が勞賃に還元せられ得るか否かに存する。蓋し、此の問題に就てマルクス、ラッサールが彼等の批評家と異なる所は、全く、後者が企業所得を目して企業家の精神的勞働に對する報償に過ぎずとしたに反し、マルクス、ラッサールは斯の如き報償は——資本家は同時に企業の指導者であると云ふ事を前提して——單に企業利得中の云ふに足らぬ部分を成すに過ぎず、従つて企業利潤を説明する事は不可能である云ふ事を證明したと信じた事である。價值構成的なる社會的に必要な勞働をマルクスの解釋と云はれる純技術的意味の勞働と解するか、或はラッサールの觀方とされる量的、社會的欲望に對するその適應の意味の勞働と解するかと云ふが如き抗義はその力に於て相伯仲してゐる事は明白なるが故に社會的に必要な

る労働に關する後の定義から企業利得の是認即ち企業利得の價值構成的労働に對する勞賃への還元を抜き出さんとする試みは不成功と見られると云つても敢へて差支へない譯である。企業の指導が精神的價值構成的労働である事——之をマルクス、ラッサールは拒みはしなかつた、従つて之を證明する事は如何にしても無用の沙汰であつた。所で企業家利潤は取りも直す斯の如き生産的労働の報償に外ならぬと云ふ事は、價值構成的労働に關する第一の定義に由つても第二の定義に依つても證明する事は出來ないのである。

併し乍、吾人は一定の、嚴密に限定せられたる課題を以て吾人の課題とするものなるが故に、此の方面の問題は餘り深く吾人の問題にはならない。吾々は、單純に、科學的社會主義の反對者が社會的に必要なる労働概念の新しき觀方に於て如何なる武器を發見せんとする積りであつたかを示す爲に此の問題を掲げた迄である。

何より、吾人の興味を惹くものは、上述の著者達がマルクス價值論とラッサール價值論との區別を社會的に必要なる労働概念の異なる觀方に於て洞察し得ると信じたとして、如何なる程度に於て彼等が此の區別を正して把握したかの問題である。ラッサールが社會的に必要なる労働を彼に歸せしめられたる意味に於て解したと云ふのは正しいであらうか。若しさうだとすれば、斯の如き觀方はマルクスの價值論と對立するものであらうか。斯の如き、同一なる概念の異つた觀方の價值論に對する意義の批判に移るに先ち、吾々は先づ是等の問題に答へねばならぬ。

併し是等の問題には更に他の問題、即ちマルクス自身此の社會的に必要なる概念を如何に解したかと云ふ問題が先行する。併し乍、吾々がラッサールに對するとして彼のマルクスの概念の觀方の是否に關する裁判官たらんとするならば、吾人はその前に吾々自らマルクスに於ける斯の概念の意味に就て明瞭に理解するを

要する。之を明瞭にすることは、一方、今日に至る迄も此の問題に關して種々の見解が存在する丈益々否み難いものゝ如くである。

第二章 マルクス、ラッサールに於ける

價值構成要素としての社會的に 必要なる労働の概念

マルクスの價值論が抑々から面接した最初の攻撃は、マルクスは價值問題の取扱ひに於て餘りに一方的に技術的方面のみを注意して、變化する社會的需要の商品の交換價值に及ぼす影響を注意しなかつたと云ふのであつた。之は、既に前章に於て述ぶる機會を持つた如く、主としてマルクスの有名な、價值構成的なる、社會的に必要なる労働の定義に據つて證明されたものである。マルクス價值論に對する斯の如き非難の聲が、啻に公然と名乗つて出たマルクスの反對者許りでなく、『社會主義真髓』を著はして社會主義者仲間の洽き同感を買つた、アー・エー・

フリードリッヒ・セツフレの如き人々に由つても擧げられたと云ふ事情はマルクス價值論の信奉者迄もマルクスの社會的に必要なる労働の概念をもつと深く研究して見ねばならぬと思つたに就て資する所少くなかつた。併し斯の如き研究の結果は實に種々様々であつた。或る論者、而も、反對者の論難に堪へ得たものは、依然として此の概念の舊來の觀方を固執したに反し、他の充分抵抗し得なかつた論者は需要の要素は既に『社會的に必要なる労働』なる表現の中に含まれてゐる事を證明する事に依つて免れ得ると考へた。

概観する所、最初に社會的に必要なる労働の概念に斯の如き理解を與ゆる試みを爲したものは、マルクス價值論の最も熱烈なる信奉者の一人たるアー・ツェー・シユラムであつた。彼は斯の如き觀方の最初の、同時に併し最も典型的なる代表者である、そして此の旨意に關する彼の言説は極めて蠱惑的に見えたので、マルクスに於ける社會的に必要なる労働概念の斯の如き觀方が如何に謬つたものであ

るかはその言説そのものに據つて最も容易に證明し得らるゝにも不拘、時が經つに従ひ随分多數の信奉者を、就中マルクス流價值論の代表者の間に見出した位なので益々注目に値するのである。

シユラムの考へは、若しマルクスに對して偏狹なりとの非難、即ち宛もマルクスが商品の價值決定に際して量的に變動する社會的欲望の役割を全然無視したかの如き非難が提起せられても、斯の如き非難を、マルクス側に於ける社會的に必要なる労働の誤つた定義に歸着せしむる事は出來ない、寧ろ排他的に解説者側に於ける此の概念の誤まれる解釋に歸着せしむべきであると云ふのである。何故かと云ふに、社會的平均労働に非ずして社會的に必要なる平均労働が價值を構成するものであるとする所のマルクスの單純なる價值定義中には、既に、變動する社會的需要の價值決定に及ぼす影響が十二分に考慮せられてゐるからである。

シユラムは之を一の例を以て釋明した。

社會は一定量の穀物を使用する。その生産に費された、或は費さるべき、一般に人間的なる、社會的に必要なる労働は、時間で測定せられて、一切の穀物の價值を決定する。使用せられるより、多量の穀物が生産されてゐれば、社會的に必要なるより以上の労働が穀物に費されたのである。従つて、二倍丈の穀物が培養されたとすれば、その中には現實に穀物獲得に費された労働の半分の社會的に必要なる労働が潜在するに外ならぬ。

之に反して、社會的需要が、收穫物に由つてその半分しか充足せられないであらう場合は、之は正しく、『社會的に必要なる労働』の十分なる量が穀物栽培に費されなかつたのである。現存の穀物量は現實の社會的平均労働が生産に費されたもの、二倍高の交換價值を代表する。従つて、價格と價值は同じ高さであるべきであると假定すれば、パンの價格は豊作には低落するであらう、パンは廉くなるであらう、一時間の労働^{アルバイツ}収益^{エクトラーゲ}を以て平年の二倍を買ひ得るであらう。之に反し

社會的需要を満すに必要なもの、半分の穀物しか收穫せられなかつた場合は、パンの價格は騰貴するであらう。一時間分の労働収益の對價としていつもの半分量のパンを買ひ得るに過ぎないであらう。(註)

(註) アー・ツェー・シユラム『社會主義の眞髓』フオアゲルツ』一八七七年六二號所載。

商品の作出に費されたる労働は、夫が支配的生產關係に應じて給付せられた場合に始めて價值を決定するものとして考へられると云ふ事は、シユラムに従へば、當然自明の理であるに過ぎぬ。之は既に、マルクスに従へば商品の價值は個人的なるに非ずして、商品中に含まれた社會的労働時間に依つて決定されると云ふ事情が指摘する所である、彼が社會的に必要なる労働の概念の説明に持出した例は、全く此の『必要』なる一小文字を如何に解すべきかを示さんとするものであつて、シユラムの意見に従へば、既に述べた如く、商品中に體現されてゐる社會的平均労働は、商品が社會的欲望に照應する量に於て存在する場合にのみマルク

スの意味に於て必要なる労働と見做す事が出来ること云ふのである。

従つて、『社會的平均労働』の概念が技術的要素を含んでゐるならば、必要なる労働の概念は——欲望の要素を含蓄してゐる。之を以て、『社會的に必要なる労働』の概念には、技術的要素と欲望の要素と二要素を含んでゐる。謎は解決されて、シユラムは自ら大得意だつた。何故なれば、今や彼は最早反對者の批難を恐れ憚るを要せず、反對者に對してマルクスの價值定式は管にその主張の如く、偏狭ならぬのみならず、價值論としては最も徹底せるものなることを證明し得るに至つたからである。

就中、シユラムの意味に解するならば、價值構成的にして價值決定的要因としてのマルクスの社會的に必要なる労働概念は、夫が作出は排他的に人間労働を必要とする財貨のみならず、夫が作出は人間労働のみならず、自然的要因にも依存せる財貨にも、即ち任意に増加し得る財貨のみならず、稀少財にも適用しても同

一の効果を獲る事が出来る。任意に増加し得る財貨の價值決定に際しては、技術的要因が決定的であつて、商品の價值は商品に實際含まれてゐる社會的平均労働に照應するが、夫が生産は自然的要因にも左右され、従つて社會的需要に照應して任意に増減し得られざる財貨に於ては、之に反し、欲望要因が價值決定に於ける尺度を供するものである。『豊作或は不作の收穫物には恐らく同一量の人間労働時間が存する——併し全生産物の價值は此の場合管に使用された許りでなく、社會的欲望充足に必要な労働時間に従ふが故に、不作の場合には穀物—シエツフェル當り夫丈け高い價值が與へられる』(註)。

(註) 『私有財産の價值に及ぼす影響並に生産物の分配』未來 一八七七一七八年四七六一四七七頁

マルクスの社會的に必要なる労働概念は、是等二個の、即ち技術的要素と欲望の要素とを含有し、斯くて一切の財貨に就てその眞なる事が證明されると云ふ事はシユラムにはマルクス價值論の特徵的標識とさへ見わた。そこで彼は、余は

茲に「マルクス價值論の高き科學的意味」を視ると明白に宣言するに至つた(註一)。何故なれば、若し「社會的に必要なる労働」なる表現がマルクスの諸解説が箴め込んだものしか意味しないとすれば、マルクスの價值定義とケリーの夫と何處が異なるであらうか。然り既にケリーは價值を定義して「現實の、商品作出に費された労働に非ずして、再作出に費される労働が眞の價值實體を成す」と云つた(註三)。故に、「社會的に必要なる労働」を一定の生産關係の下に於て何等か或る使用價值を作出するに技術的に必要なる労働とのみ解せんとするならば、そはマルクス價值論の本質を完全に見過つたものと云つて好い。所が夫は誤りである。労働がマルクスに従ひ「社會的に必要」であるが爲には、シユラムの見解に従へば、夫は猶一つの條件を充すを要する、そして此の條件と云ふのは、此の如き労働に由つて生産された生産物が量的にも社會的欲望に適應してゐると云ふにある。即ち労働は此の生産物に對する社會的欲望を超過してもならぬし夫かと云つて夫以下に止

まつてもならぬと云ふ事に存する。そして、技術的方面並に量的に一定せる社會的欲望に關する是等の二條件を充すが如き労働にして始めてマルクスの意味に於ける價值決定的「社會的に必要なる労働」と觀做すを得るのである。

(註一) シユラム、『社會主義の眞髓』フオアエルツ「一八七七年六二號

(註二) 同前

此の事が種々の方面から看過せられて、マルクスに對して、彼は「餘に偏狹なる従つて割切ならぬ仕方」で労働を價值の眞の實體であると力説してゐるが、併し反面に於て「商品の稀少性も即ち商品の自然的要因も價值に對して著しい影響を及ぼしてゐる」(註一)ことは顯著な事であるとの批難が提起せられたが——そは、シユラムの考へに依れば、全く簡單に、マルクスが交換價值を、常に任意に増加し得る財貨即ちその無制限に増加し得る爲に社會的欲望に容易に適應せしめられ従つて夫が價值決定に際して欲望の要素の何等著しき役割を演じない財貨に於て

のみ證明した態度から説明せらるゝのである(註二)

(註一) シュラム、『カルル・マルクスの價值論』未來第五卷一二七頁

(註二) 一方シュラムは、マルクスはその價值論を任意に増加し得る財貨に於てのみ證明したと云ふ事を斯う云ふ事でも説明してゐる、即ち(一)『無制限なる競争、完全なる自由貿易』に於ては、唯一の價值實體たる労働時間に還元せられ得ない商品は稜々たるものに過ぎない、自然的要因でさへ、各國の穀物や木材や石炭や皮革等の需要が他の各國から無制限に得られるならば、影響しなくなる、次に(二)シュラムの見解に従へば、マルクスが『經濟學批判』及び『資本論』第一卷に於て『古典派の經濟學を批評してリカードに於て古典學派は完成したと論じ「商品」及び「商品價值」を論ずるに當りてリカードの引いた境界を同様に固執した事位自然であつたし、自然であることはあるまい』と(同前掲一二八頁)

併し乍、若し『社會的に必要なる労働』概念の眞の本質並に欲望が價值決定に及ぼす影響を認識せんとするならば、右の労働概念を、任意に増加し得る財貨に由つて證明せず、夫が作出は自然的要因に制縛されてゐる財貨に就ても證明せねばならぬ。何故なれば、斯の如き財貨に於ては、普遍的に人間的社會的労働は、時間を標準に、『必要なる労働』なる言葉が全社會の欲望と此の如き欲望を充すに足

る労働量との割合を表示するが如き仕方では、その價值を現はすと云ふ事は、蓋し普通に起る所であるからである。(註)

(註) 『未來』一三三—一三四頁

併し、苟も一旦社會的に必要なる労働概念の眞の意味を認識したならば、即ち此の概念には、『その時の生産關係の下に於て該生産物の作出に必ず要せらるゝ労働に對する顧慮と同じく社會的欲望の充足に必要な労働に對する顧慮も含まれてゐる事を看取したならば(註)、シュムラの考へに依れば、然らばマルクスの價值論に對して提起された一切の攻撃は屏息するであらう——斯の如き批難が如何なるものであるかは既に聽くを得た、即ち曰はくマルクス價值論は餘りに偏狹に労働を價值の眞の實體と主張する、曰はく自然的要因の價值決定に及ぼす影響を看過してゐる、曰はくマルクス價值論は單に任意に増加し得る財貨に適用されるに過ぎない等々、——之を要するに、去れ、マルクスの定立せる價值論は希ふべ

き何ものも残さないと云ふにある。

(註) 同前掲四七六頁

そして實際若し社會的に必要なる労働は價值決定的労働として技術的要素と欲望の要素の二重の要素を含有する事を承認するならば、一切の矛盾は斯の價值定式を以て解決せられるであらう。何故なれば、一の要素が價值の説明に間に合はない場合は、丁度都合よく第二の要素が登場するからである、吾々は、シユラムに従へば商品の價值は、誠に重寶に、或は商品に含まれた社會的平均労働を標準とし、或は社會的需要を充足するに必要な労働を標準とするものなる事を述べた。併し同様に斯の如き價值定式に基づいて——そしてシユラムは實際夫をやつたのであるが——労働は價值の唯一の實體でなく、自然的要因も價值決定に於て労働と同様に積極的なる役割を演ずることも證明出来る。即ち労働の生産力は自然要因に、作出された生産物の量は労働の生産力に、當該生産物に對する社會的

欲望が充足し得られるや否やは生産物の量に依存する、所で社會的欲望は商品の價值に決定的影響を及ぼす。斯くて自然的要因は間接に價值決定的要因として現はれる。何故なれば、既に述べた如く、シユラムの解釋に従へば、個々商品の價值は管に労働の生産力の増減に由つて或は下り或は上る許りでなく——之は云ふ迄もなくマルクスの價值法則に完全に照應するであらう(註一)——全生産物は労働の生産力の増減の場合に於て、全生産物に含まれてゐる労働が減じたり増したりしないに不拘價值を減じたり増したりするであらう。斯の如き價值論は勿論稀少財にも應用せられ得るであらうし孤獨なる人間の價值表象にも照應するであらうが(註二)、斯の如き價值論は唯一の誤謬を持つてゐる丈である。即ち、夫はシユムラがマルクス價值論として挿入せんと欲するに不拘、さうではないと云ふ唯一の誤謬を有するのみである。何故なれば、マルクスの價值論は事實労働を以て「價值の眞の實體」なりと力説強調するからである。マルクスの價值論に従へ

ば、實に、稀少性や自然的要因は何等價值決定的要因でない、マルクスの價值論は結局任意に増加し得る財貨にのみ妥當するを要するも稀少財に妥當するを要するものではない。マルクス價值論信奉者の任務は今や此の價值論が夫にも不拘或はもつと正確に云へば、宛も夫故に唯一の正しい價值學說である事を示すにある。併しシユラムは全で正反對の道を打開したものである。彼はマルクス價值論の正しい所以を、反對者達が彼の價值論に加へたものを悉く取り入れて解釋する事に由つて證明せんとしたのである。

(註一) 労働の生産能率が高まると全生産物に含まれた労働がより多量の生産物に分配される。各個の生産物の作出に費された労働は減じ、夫が爲に各個の生産物の價值も減づる。労働の生産能率が減じた反對の場合ではその反對である、併し孰れの場合にしても、全生産物はマルクスに従へば同一價值を有する、蓋し、全生産物の作出に費された労働は何方の場合にも矢張り同一であるからである。同様に何れの場合にも、商品の價值量は唯獨り商品に含まれた社會的平均労働で決定せられるのみである事も明である。

(註二) シユラムの『孤獨なる人間の價值觀念』未來』第四卷参照

かゝるが故に、マルクス價值論の排撃者たるアー・ツェー・シエツフレがその著『社會主義の眞髓』第三版に於て、『フォルエルツ』紙上に於けるシユムラの論文を引證して、社會主義者は、若し彼等にして社會主義の全經濟學を空想に終らしむるを欲しなければマルクスの『財貨の社會的労働費用價值に關する根本的命題を根底から修正すべし』とする彼自身の要求に従つたと歡喜を以て確言し得たとて敢へて驚くを須ひない。何故に然るか云へば、シエツフレの考へに従へば、『フォルエルツ』誌はマルクスの『社會的に必要なる労働時間』の概念に余(セツフレ)が使用價值と名付けた所のものを「社會的に必要なる」てふ概念に宿らしめた説明を與へたから洵に尤もである(註二)。成程シエツフレ自身はマルクスの社會的に必要なる労働概念の斯の如き解釋を誤りであると考へたに相違ないが、併し彼自身としては斯の如き説明に反對して抗議すべき何ものも持たない事を宣言した。蓋し、此の説明は『少くとも原則として彼が力説した變動する欲望の交換價

値決定に對する必然的協同を通用せしむる』(註二)が故である。シエツフレはマルクスの價值論に對しては此の意味に於て精々唯一事を抗義し得るのみであらう。換言すれば彼は何の爲に『交換價值決定の全然獨立なる第二の要素、社會的使用價值を社會的勞働費用量に無理に押し込むことが必要なのか正しく理解せんとはしなかつた(註三)。併しシエツフレの言葉の如く、『社會的勞働費用と社會的欲望とは、共に獨立に且つ混合的交雜なく』交換價值を決定する要因であると云ふならば、それは餘りに簡單に過ぎると同時に餘りに實際的過ぎるであらう(註四)。

(註一) アー・シエツフレ『社會主義の眞髓』第七版ゴータ、一八七九年四八頁脚註、

(註二) 同前

(註三) 同前

(註四) 同四八頁

そして夫に對するシユラムの答へは如何であつたか。シユムラはシユラムで『斯の如き(シユラムの如き)解釋に於けるマルクスの理論に對しては世人は恐らく有

效なる抗義を提起し得まい』(註)とのシエツフレの承認を『狂喜して』『受け入れた』のである。

(註) 『フォルエルツ』一八七七年第一二八號

却說シエツフレは、シユラムの解釋と彼自身の價值論とは何等相違する所なく、あつても精々比較的大なる混亂と曖昧に過ぎざるが故に、シユラムの解釋に於けるマルクス價值論に對しては何等抗義するを得なかつたことは既に述べた。併しシユラムはシエツフレの斯の如き明快なる宣言にも不拘をして何等かの方法で彼を反駁する事すら試みる事なく、シエツフレが斯の如き形式でした『承認』を『狂喜して』受け容れたので、彼自らも是等二個の價值論には何等本質的區別を見ざる事を承認した譯である。又事實上二個の價值論が何に由つて相互に異なるのであるか不可解である、蓋し、成程その一は價值決定に就て只一個の要因を認め、他は二個の要因を認めるに相違ないが、前者はその唯一の價值決定要因に對し

て、第二の要因も自らその中に含まれてゐると云ふが如き解釋を與へるからである。マルクスの價值論をシュラムの解釋に於て把握せんとするならば、シェツフレの價值論とマルクスの夫との間には何等の區別も存在しないであらう。何故ならば、斯くて吾人の得た所は次の如きものであるからである。即ちシェツフレは社會的勞働費用と社會的需要と二個の交換價值決定要因を認め、マルクスは又單に一個の價值決定要因——即ち社會的に必要なる勞働時間を認め、併し此の如き一要素に對して、その中に二個の要素、社會的欲望と同じく社會的勞働時間が含まれてゐると云ふが如き解釋を與へたと云ふ事である。

斯の如き、形式を見れば成程異つてゐるが、内容から云へば同一なるものに歸する概念を區別する事の實際に如何に困難であるかは、シュラムでさへ他の場合には口を極めて攻撃した市民的經濟學者の價值定義を場合に由つては彼自身の價值の本質を説明する例として適切であることを認めざるを得なかつたと云ふ事情

が暗示してゐる。

シュラムはその「孤獨人の經濟觀念」なる論文に於て、彼は之に依つてマルクスの價值論は孤獨索居の人間の經濟にも妥當する事、即ちマルクスの價值論は孤獨人の經濟觀念にも照應する事を證明せんとするのであるが、次の如き例を引用してゐる。即ち、ロビンソンが一片の土地に玉蜀黍を植えるに就き百二十時間を費消したと假定しやう。不順なる天候のお蔭で玉蜀黍はロビンソンが年々百二十マースの玉蜀黍を費消するに不拘僅か六〇マースの收穫しか與へない。若しロビンソンが此のヒドイ不作を豫見してゐたならば、彼は二倍の地面に玉蜀黍を植へ、百二十マースの玉蜀黍を獲る爲に百二十時間ではなく、二百四十時間を働いたであらう。さてマルクスに従へば、生産物の價值は生産物中に事實上含まれてゐる平均勞働ではなく、社會的欲望の充足に必要な勞働に依りて定まるが故に、此の六〇マースの玉蜀黍は二百四十時間の價值を有し或は二時間勞働の所産たる一マース

スは四時間労働の價值を代表するに相違ない。シユムラはそこで、ロビンソンも「價值を同様に高く評價するであらうか夫とも現實にその上に費された労働を標準に評價するであらうか」(註一)如何と云ふ疑問を提出した。そしてロビンソンも玉蜀黍一マース毎に二倍に評價するであらう、丁度「宛も全欲望の充足に必要な労働時間が玉蜀黍の既存量の全價值として評價される如くに、宛もマルクスの價值論が計算の基礎となる如くに」(註二)評價するであらう事を證明した後、彼は直ぐ續けて「斯の如き特殊の場合は價值は實際に「使用價值と費用價值との結合」として示すことが出来る(之はシユラムがマルクス價值論の信奉者として同一論文の冒頭に於て嘲笑した價值定義である)何故なれば、此の——使用價值に對する欲望の充足に——必要な量と既存量との比(即ち $120:60=2$)と費用價值即ち既存量の作出に現實に投せられた労働時間(百二十時間)とをかけたものが、必要な労働時間に於て計算された斯の如き財貨量の價值を決定する ($2 \times 120 = 240$

時間が六十マースの價值であるからである。)(註三)

(註一) 『未來』第四卷一一二頁

(註二) 同一一三頁

(註三) 同前

「斯の如き特別の場合には」價值は「使用價值と費用價值との結合」を表はすとシユラムは考へる。實際、斯の如き場合が一體除外例を成すであらうか。シユラムは元來此の場合を寧ろ一の典型の場合として示したのではないか、即ち夫は彼がマルクス價值論をその純粹なる形式で再現して見せるからこそ、「マルクス價值論が彼の基調をなすからこそ」注目に價ひする場合として示したのではないか。そして若し、シユラムと同様に或る商品の價值は常に商品に含まれた社會的平均労働に由るのみならず、社會的欲望に由つても決定されると云ふ見解を分つならば、商品の價值は「使用價值と費用價值との結合」以外の何ものを現はし得るであ

らうか。『使用價值』の代りに『社會的欲望』を『費用價值』の代りに『社會的平均勞働』を置き換へても、此の式には何等の變化もないであらう。然るにも不拘シユラムが斯の如き價值定式を廻避して、此の定式を、勿論既に述べた如くさうすべき少しの理由もないに不拘、飽くまで例外的にのみ妥當せしめんとするならば、それは明に次の理由に基づくものである、即ち斯くては彼の價值觀と彼自身の皮肉なる表現を藉れば、成程勞働を價值構成的要素として『愈々力説しはする』が、『ミス』の勞働の外にバスタアの欲望も認めるが如き經濟學者の價值觀とは何等擇ぶ所ない事をシユラム自身が看取したであらうからである。(註)

(註) 『未來』第四卷一〇七頁

シユラムは公然に『市民的』經濟學者の價值定式を貶しつけたので満足かも知らぬが、吾々は何に由つて彼の價值論と後者の夫とが異なるか解するを得ない。

社會的に必要なる勞働概念に關する斯の如き觀方のマルクス價值論に對する意義並に射程は、此の如き理論の信奉者が、同額の資本は有機的構成の如何に關せず、同じ時間には同額の利潤を作出すると云ふ事と、生ける勞働のみが新しい價值を作出し得ると云ふマルクスの價值法則とは如何に結合せらるべきかと云ふ有名なる謎に面接した時、特に著く現はれねばならなかつた。

マルクスの門下達が此の謎を解かうとして最初に思ひ付いたことは、生産物はその價值で交換される時は無條件に異つた利潤率を齎さねばならぬから、資本の異なる構成に於ける等しき利潤率なるものは、生産物とその價值を標準に交換せられず、價值と價格とが一致せざるに由つて始めて發生し得ると云ふ思想であつた。由是觀之、問題は、需給關係に由つて惹起された生産物の價格と價值との乖離と價值法則とは矛盾しないと云ふ證明を措いてあり得べくもなかつた。そこで、マルクスの價值論を正しく把握し、多少とも、エンゲルスに由つて投せられた謎の解決に興味を有つてゐた人々に由つて問題が提出されたのである。

マルクスの『社會的に必要なる労働』をシユラム流に解釋するものにとつては既に斯の如き問題提出と云ふ事すらもが不可能事であつた。何故なれば、彼等の見解を以てすれば、競争即ち需要と供給の變化浮沈が社會的欲望、就中生産物の價值そのものに作用する要因であつたからである。従つて、生産超過或は生産不足を通じて價格の變動が発生するならば、夫は單に此の如き生産超過或は生産不足に由つて惹起された價值變動に照應するに過ぎず、従つて斯の如き場合價格と價值間の齟齬は問題になり得ないのである。

そこで、相等しき利潤率の謎を解かうと企てたもの、一人、フーゴー・ランデは尤も彼はその際社會的に必要なる労働概念に關してシユラムの解釋に影響されてゐたので、コンラッド・シュミットが價格と價值の齟齬は價值法則と矛盾しない事を證明せんとしてやつた『恐るべき思索的精進』を『完全に無用の長物』だと宣言した。『何故なれば、斯の如き齟齬は價值法則と矛盾する恐れがない許りか、斯の

如き齟齬は寧ろ——夫が正しく排他的に生産過剩或は生産不足に依存する以上——簡單に價值法則そのもの、中に包含されてゐるからである』(註二)。之は、誰でも、マルクスに従へば、商品の價值は商品中に事實投せられてゐる社會的平均労働に依るに非ず、量的社會的欲望に適應する意味に於ける『社會的に必要なる労働時間』に依ることを想ひ起せば忽ち明瞭となることである。

(註) フーゴー・ランデ『剩餘價值と利潤』ノイエ・ツァイト』第九卷一號五九〇頁

『生産超過が存在すれば、「社會的に必要なる」労働時間は少しも費されなかつたのであり、過度に費された労働時間は何等の價值を生せず、全生産物は、通常の生産に於てより少き生産量を受くるであらうと同量の價值しか獲得しない。(生産不足の場合は勿論同じ事が正反對の方向に起る)、換言すれば、價格は生産物に結晶せられた事實上費された労働時間には照應しないで、恐らく生産物に於て結晶せる社會的に必要なる労働時間に照應する、即ち價格は徹頭徹尾價值法則を

標準に生産物の價值に照應する——此の場合一般に價格と價值の乖離は固より全然問題になり得ない』(註二)。斯くてランデはその歸結として次の如き結論に達した。即ちマルクスに従へば、一般に價格と價值とは同一であるとして『若しマルクスが不一致の可能性を考へたとすれば、夫は正しく例外の場合を考へてゐるのである』(註二)。

(註一) 『ノイエ・ツァイト』第十一卷第一冊五九〇頁

(註二) 同前脚註。

所でコンラッド・シュミットがランデに對しマルクス自身の言説を引用して、マルクスに従へば競争は『商品の觀念的價值關係を直接實現する力ではなく、此の如き關係を、その時々^々に於ける商品交換能力のより大なる或はより小なる程度に由る修正を経て、實現する』(註一)力であるとの確信を承服せしめんとした時、ランデが之に答へて、兩人間の相違は何よりも社會的に必要なる労働概念の相異な

る觀方に求むべきであると云つたのは尤もである。蓋し、若し、社會的に必要なる労働時間とは『平均的に必要なる』労働時間即ち單に技術的意味に於て社會的に必要なる労働時間と解すべきであるとするならば、コンラッドは決定的に正しい譯であるが、社會的に必要なる労働時間の概念が夫自身の中に欲望の要素をも含んでゐる事を認むるならば、『價格動搖には競争を通じて、即ち需要と供給に於ける變動を通じて同様の價值變動が照應する、従つて毫もその矛盾は問題となり得ない』(註二)事は明白であるからである。

(註一) 『ノイエ・ツァイト』第十一卷第二號

(註二) ライデ『利潤率』ノイエ・ツァイト』第十一卷第二號

却説既に『資本論』第一卷には、マルクスが經濟的要素としての競争に如何なる役割を振り附けたかに對して充分なる暗示があつたが、斯の如き問題が特に明瞭に取り扱はれてゐる『資本論』第三卷は、マルクスに従へば競争、需要供給關係は

單に價格に作用するのみで商品の價值には影響しないと云ふ事、價格は『結局』に於ては價值に由つて規律せられる外ないが、直接には商品の價值とは一致せず、或は極めて稀に、即ち宛も需要供給が相蔽ふ場合、語を換へて云ふならば、夫等の作用が止揚せられた場合にしか一致しないと云ふ事に對して最早何等疑を挾む餘地を残さなかつた。所が之が爲に、嘗にマルクスの價值論に於て價值と價格に關聯して競争の占むる役割に關するランデの誤れる見解が反駁せられた許りでなく、夫に由つて必然にランデの、價值決定的要素としての社會的に必要なる勞働の概念に關する觀方も反駁されざるを得なかつた、蓋し競争の價值に及ぼす影響に關する彼の見解は彼の社會的に必要なる勞働の觀方からの論理上必然の推論であつたからである。その推論が誤つてゐることが證明されたならば、夫は據つて以てその推論が引き出された前提も誤つてゐる事を示したからである。

そして夫にも不拘、その『資本論』第三卷が、マルクスは價值決定的なる社會的に必要なる勞働概念に欲望の要素を引き込んだのだと云ふ意見が益々力説されること云ふ結果を生んだ。變つた事は唯マルクス價值論の若干の遵奉者が斯の如き價值定義を批評した位であつた。シュラムは、既に述べた如く、マルクス價值論に従へば價值決定的なる社會的に必要なる勞働はその中に同時に技術的要素と欲望の要素を含んでゐると云ふ事を以て之ぞ『マルクス價值論の高級科學的重要さ』であると考へたが、他方社會的に必要なる勞働に關する丁度同じ觀方がマルクスの他の一人の門人エドゥアルド・ベルンシュタインをしてマルクス價值論から離反せしめ、レオ・フォン・ブッフに依て提唱された價值論に與みせしむるに至つた。夫に由ると二様の價值、勞働價值(勞賃と勞働時間に依つて決定された)と評價價值(生産物が市場に於て獲得する價值)とは嚴格に區別し得らるゝものである。假令ベルンシュタインがブッフの價值論を全然『異論なき』ものとは考へなかつたとすとも、彼にとつて『二個の價值概念を使ひ別ける事、同一概念に二個の相互に仲

和的なる原則を包含せる定義を與へる事——「社會的に必要なる労働時間」はその場合であるが——はより『合目的々』に思はれた。(註)

(註) エドワード・ベルンシュタイン『労働價值か効用價值か』『社會主義の歴史と理論』ベルリン、一九〇一年三七二頁。

既に以上述べた所に由つて明なる如く、マルクスに於て社會的に必要なる労働の概念が斯の如き二個の互に排除する原則を包含すると云ふのが實際正しいならば、吾人も亦ベルンシュタインの考へに與みするものである。併し之は果してさうであらうか。

吾人の見解を以てすれば、決してさうではない。問題を最少し精密に觀察しやう。

若しシユラムやその信奉者達が、マルクスは價值法則の取扱ひに於て商品の價値に對する變化極りなき社會的欲望の重要を無視しはしなかつた事を證明せんと

したのならば、彼等は、社會的に必要なる労働概念そのものを説明せんとする努力は之をせず共濟んだ、何故と云ふに、マルクス自ら社會的に必要なる労働に與へた定義は此の目的に對して充分満足であつたからである。即ちその定義は明瞭に、社會的に必要なる労働とは現存の社會的、標準的生産條件の下に於て何等かの使用價値を現出するに必要な労働と解すべきであると云つてゐるからである。その場合何等かの生産物とか何等かの有用なる物財とかせず、何等かの使用價値を現出するにと云へるはよく指摘せらるゝ所である。併し此の『使用價値』なる言葉が斯の如き關係に於て使用せらるゝ時は、交換價値の負擔者としてであつて、マルクスを以てすれば、到底自然的使用價値即ち物財の人間の欲望満足能力と同一ではない。若し、夫自體は極めて有用なるかも知れぬ生産物に對して、何等社會的欲望が存在しないならば、マルクスに従へばその生産物は使用價値たる事を廢めるのである、即ちその人間の欲望を充足する能力あるにも不拘、その自

然、使用價值に關せず、該財貨は社會的欲望を充足する事が出来ない。マルクスに従へば、何等社會的欲望が存在せざるが故に夫は社會的使用價值たるを得ない、そして夫に伴ひ一般に交換價值の負擔者としての使用價值たるを得ない。(註) 従つてマルクスが此の意味に於て使用價值とするものは、自然的使用價值ではなくて、社會的使用價值である、そして斯の如きものとして始めて使用價值は交換價值一般としての商品にとつて問題となるのである。

(註) 『商品を生産するには彼(生産者)は常に使用價值を生産するのみならず、他人の使用價值、社會的使用價值をも生産するを要する』(『資本論』第一卷七頁)

併し使用價值を此の意味に於て、社會的使用價值の意味に於て解するならば、既にその言葉に變化する社會的欲望の要素が含まれてゐる事は明である。何故なら、生産物が使用價值であり得るが爲めには、該財貨に對する社會的欲望が存在しなければならぬからである。従つて例へば或る生産部門の生産物が使用價值で

あるが爲には、是等の生産物の各個に對しても欲望が存在するを要する。換言すれば、一生産部門全體の生産物が使用價值であり従つて交換價值である爲には、夫等のものは夫等に對する社會的欲望を超えざる量に於て生産せらるゝを要する。生産の多寡は従つて前以て社會的欲望に由つて限定されてゐる、或は同じ事であるが、交換價值の就中使用價值たるべき條件に由つて限定されてゐるのである。

従つてマルクスが價值決定的なる社會的に必要なる労働を斯の如き労働に依つて現出せられた生産物が使用價值であるか否かに依存せしむるならば、更に進んで『資本論』第一卷に於て、使用價值は『交換價值の負擔者』(註一)である事、如何なる物財も『使用價值たる事なくして』(註二) 價值たり得ない事、商品は『價值として實現せられ得るより前に』先づ『使用價值として實證せられる』(註三)を要する事、『商品に費されたる人間労働はその労働が他人にとつて有用なる形態に於

て支出せられてゐる場合に限つて計算せられる』(註四) 事等が云々せられてゐるならば、夫は、マルクスが價值法則の展開に際して社會的欲望の役割を充分顧慮してゐた事を立證して餘りがある。従つて若しシユラム及びその信奉者達がマルクスに於ける是等の文句を全然無視したとすれば、その理由は彼等がマルクスの『使用價值』概念に就て誤まつた觀念を持つてゐたか或は若しかしたら此の概念からは彼等の希望する結論が得られない事を看て取つてか孰れかより外にあり得ない。

(註一) 『資本論』第一卷二頁

(註二) 同七頁

(註三) 同五頁

(註四) 同前

一體如何なる役割をマルクスは交換價值に關聯して使用價值に歸したのであるか。——既に述べた如く、單に『交換價值の實質的負擔者』たる役割に過ぎない。

使用價值の形態に於てのみ交換價值は流行程に於て實現し得らるゝのである。従つて使用價值たることは凡ゆる交換價值の當然自明の前提である。併し之を以て使用價值の交換價值に對する意味も亦竭されてゐるのである。交換價值は夫以上には使用價值と何等の關係もない。之に反し、交換價值の本質を研究し、その實體並に價值量の尺度を識らんとするならば、夫はマルクスに従へば正しく商品の使用價值を離れて始めて可能である。『……此の商品の使用價值の抽出こそ』は『商品の交換關係を明瞭に特徴づけるものである。その交換關係内に於ては使用價值は夫が適當なる割合にて存在する限り他の凡ての使用價值と全然相等しいのである』(註一) 交換價值としては商品は『一原子の使用價值も』(註二) 含蓄せぬ。或る商品の價值を形成するものは獨り商品に含まれた抽象的人間勞働あるのみである(註三)。そして獨り斯の如き商品に含まれた『價值形成的實體』の量が——夫が生産物の作出に平均に必要な量を表はす限り——時間を標準に測つて商品の價

價值を形成する。従つて若しマルクスが價值形成的、社會的に必要なる労働時間を定義して『既存の社會的標準的生產條件と労働の熟練と集約度の平均程度とを以て何等かの使用價值を現出するに必要なる』(註四)労働時間と云つた場合、斯の定式は使用價值は前提にして、一方商品に含まれた抽象的人間労働は實體にして商品に費消せられた技術的に必要なる平均労働時間は使用價值の尺度を成すと解する外はない。斯くて使用價值は交換價值の負擔者には相違ないが、夫が價值の本質を形成することもなければ、商品の價值量に何等かの影響を及ぼすこともない。商品の使用價值は唯單に商品が交換せらるゝ動因である。併し此の商品が據つて以て他の商品と交換せられ得る割合を決定する事はない。換言すれば使用價值は商品の價值並に價值量を規制しない。商品は他人にとつて何等かの使用價值でないかあるか孰れかである。前の場合は勿論交換の動因は缺如し商品の交換價值は實現し得られず、商品に含まれた労働は徒に費消せられた労働で一般に問題

にならないが、後の場合は商品の價值量は使用價值に依存せず、獨り商品に含まれた技術的に必要なる労働のみに依つて決定される。従つて若し使用價值が交換價值の實現に至大の意義を持つてゐるとするも、使用價值は價值決定の要素として、商品の價值量が依存せる要素としては一般に考量に上らない譯である。

(註一) 『資本論』第一卷三―四頁

(註二) 同四頁

(註三) 『使用價值或は財貨は……抽象的人間労働がその中に體化或は實現されてゐるが故に、唯一個の價值を有するのみである』(『資本論』第一卷三頁)

(註四) 『資本論』第一卷五頁

今社會的欲望はマルクスの言葉を藉れば『社會的潛勢力に基づく使用價值』(註)即ち社會的使用價值に外ならぬ事を識ると、マルクスが交換價值に關聯して社會的欲望に歸した役割は取りも直すマルクスが使用價值に歸した役割で、即ち凡ての商品の自明の前提(社會的欲望なくんば使用價值なく、使用價值なくんば交換

價值存在せず)で、價值形成的、要因たる役割ではない事が判る。

(註) 『資本論』第三卷第二冊七六頁

併しマルクスが交換價值に關聯して社會的欲望に如何なる役割りを歸したかと云ふ事の證明は態々迂廻せる方法を以てせずとも、マルクスは『資本論』の第三卷に於て而も市場價值の章に於て此の問題そのものを頗る明瞭に論じてゐる。そして茲に始めて、即ち啻に個々の商品に關聯してのみならず、全生産部門にも行はるゝ所の價值法則の取扱ひに於て始めて此の問題は根本的に検討せられ得たのである。何故なれば、マルクスが正しく考へた如く、若し『商品は使用價值を有す』と云つた場合夫は『商品は何等かの社會的欲望を充足する』事を意味すると云ふのが正しいならば、同様に他方に於て、『個々の商品のみで就て論ずる限り、吾人は斯の如き一定商品に對する欲望——價格中には既に商品の量も含まれてゐる——は充足せらるべき欲望の量に就て今更多言せずとも存在する事を考へ得る』事は

明白だからである。併し此の量は、全生産部門の生産物が一方に立ち社會的欲望が他方に立つや否や實質的要素となる』(註)

(註) 『資本論』第三卷第一冊六四頁

そして吾々は以下マルクス自らが如何に此の問題を解決するかを見やう。

マルクスは『資本論』の第一卷に於て價值の本質を發見する爲に、價值決定的要因を見出す爲に使用價值を無視した如く、吾々は、此の全生産部門の價值生産物の取扱ひに於ても市場價值の本質を見出す爲にも、こんな表現を用ひて差支へなければ、市場價值決定要因を見出す爲にも欲望要素を無視するのを見るのである。そして個々の商品の價值と同じ様にマルクスは一生産部門全體の商品の市場價值をも夫が生産に必要な社會的に必要な労働をして決定せしめるのである。斯の如き市場價值決定的、社會的に必要な労働は併し單に技術的なる平均労働に過ぎない、そして夫は『種々なる條件の下に生産された商品の價值の添加

に由つて生ずるであらう商品集塊の總價值に由り、そして斯の如き總價值中個々の商品に歸着する可除的部分に由り」(註)決定せらるゝものである。

(註) 前掲、一六三頁

商品の市場價值に對しては或は中庸の、或はより良き、或はより惡き技術的條件の下に於て生産せられた商品集塊が市場に於て最大の領域を占むるに従ひ夫々第一、第二、第三の範疇の商品がその標準となるは當然自明である。商品の市場價值は従つてその時その時で或は高く或は低くあるであらう、併し是等の如何なる場合にも技術的要素が、商品が作出せられる技術的條件が獨り市場價值の決定に對して標準を供するのである。

先づマルクスは斯くの如く市場價值の決定を説明して置き、次いで、斯の如き、技術的要素に由つて抽象的に決定された市場價值が市場に於て如何なる條件の下に於て實現せられ得るか云ふ問題を提出した。そして此の機會に初めて即

ち市場價值實現の問題に於て始めてマルクスは第二の要素、欲望の要素を論ずる事になつたのである。

マルクスの見解に従へば、欲望が丁度商品集塊を市場價值で吸収し得る位に大であれば、即ち需要と供給とが一致するならば、「商品は、よし前に研究した三個の場合の何れの場合が斯の如き市場價值を規律しやうとも、その價值通りに賣られる。商品集塊は常に欲望を充足するのみならず、之を社會的規模に於て充足するものである。之に反し商品量が欲望に對してより小なるかより大なるかすれば、市場價格と市場價值との諸々の相違が起る」(註)、市場價格は市場價值を超過するか以下に下落するかである。市場價值と市場價格は一致しない。従つて供給と需要の關係、或は他の言葉を以てすれば、欲望要素に影響するものは、市場價值の變化ではなく、唯單に商品の市場價格と市場價值との乖離に過ぎない。尤も第一の場合でも第二の場合でも、第一の場合に於てはより惡しき條件の下に生産

された商品、第二の場合に於てはより良き條件の下に生産された商品が市場價值を規律するが如くに見ゆるが故に、宛も市場價值そのものは需給關係の變動の結果變化したかの如き外觀が惹起されるかも知らぬが。

(註) 『資本論』第三卷第一冊一六四頁

商品の市場價值は是等の商品に對する社會的欲望とは何等の關係もない。市場價值は排他的に技術的要素に由つて決定せられ、社會的欲望は獨り市場價值の實現に際して、即ち據つて以て商品がその市場價值で賣却せられ得る條件の決定に際して問題となるに過ぎぬ、蓋し、『商品がその市場價值で賣却され得るが爲には即ち商品に含まれた社會的に必要なる勞働で賣却されるが爲には、此の種の商品の全量に費された社會的勞働の全量が社會的欲望の量に、換言すれば、購買力を有する社會的欲望の量に對應するを要する』(註一)からである。併し、商品がその價值で賣却されるが爲には需要と供給の合致を假定するを要すると云ふ事情こそ

は、マルクスが正しく考へた如く、十二分に、需要と供給は市場價值に對して何等の影響も及ぼし得ない事を指し示してゐる。『需要と供給が合致すれば、兩者は作き止めるので、全く夫が爲に商品は市場價值で賣られる。若し二つの勢力が全然正反對の方向に一樣に作けば、二勢力は相殺して全然外部に對して作きかけなくなり、従つて斯の如き條件の下に起る現象は、是等二勢力の干涉より以外の理由から説明されねばならぬ。資本主義的生産の眞に内面的法則が需要供給の相互作用から説明し得られないのは明白である……蓋し需要と供給が作き止める、換言すれば、合致するや否やその時始めて純粹に實現せられて來るが故である』(註二)。故にマルクスが市場價值の成立を説明する爲に、需要供給の相互作用に現はれる欲望要素を不問に附するとすれば、その場合彼は、エドゥアルド・ベルンシュタインの考への如く、『價值構成的要因』(註三)を抽出するに非ずして、却つて、マルクス自身の言葉を藉れば、『諸現象をその合則的なる、その概念に照應

せる形態に於て觀察する爲に、即ち需要供給の運動に由つて惹起された外觀とは離れて之を觀察する爲に」(註四) 需要と供給の合致を假定するのである。

(註一) 『資本論』第三卷第一冊一七二頁

(註二) 同一六九頁

(註三) ベルンシュタイン『社會主義の歴史と理論』三六九頁

(註四) 『資本論』第三卷第一冊一六九頁

マルクスが今社會的欲望及びその商品の價值に對する意義に關聯して云つた事は之よりも直す、彼が既に『資本論』第一卷に於て個々の商品の價值を論ずるに際し使用價值に關聯して、使用價值は成程價值決定の要素ならざるも併し凡ての價值の負擔者、前提なる事を證明して云つた事に外ならぬ。そして實際需要と供給の齟齬が惹起した市場價格と市場價值との乖離は、使用價值は凡ての價值の前提なりとする同じ法則に歸着せしめらるゝ。何故かと云ふに、何れかの生産部門に於て社會が必要とする以上の生産物が作出されたと假定すると、商品はその市場

價值以下の生産價格で賣られざるを得ないからである、而も、夫に對して何等社會的欲望が存在しない是等生産物の一部は使用價值たる事を止め夫に含まれた價值は從つて實現せらるゝ筈がないからである。

所で使用價值たるべき交換價值の條件は個々の商品と生産物集塊全部とでは幾分現はれ方が違ふ事は明である。個々の商品が使用價值であるが爲には之に對する何等かの社會的欲望が存在すれば良いが、併し生産物の集塊が使用價值たる爲には夫は量的に一定せる社會的欲望を充足するを要する(註)、蓋し生産物集塊の量が夫に對して存在する社會的欲望を超過する時は生産物の一部は無用となり、使用價值は夫に伴ひ交換價值たる事を止めるからである。従つて凡ての交換價值の使用價值たるべき條件は、個々の商品の場合に於ては全然單純に是等の商品は使用價值たらねばならぬ、換言すれば何等かの社會的欲望を充足せねばならぬと云ふ事に現はし得らるゝとすれば、同じ條件が全生産物集塊に就ては、夫は夫に

對する社會的欲望に照應する量に於て生産せられるを要すると云ふ風に書き換へられ得る。假令世人が早呑込みに之は二つの異つた條件である、即ち個々の商品に就ては或る異つた條件が問題で、生産物總體に就ては又他の異つた條件が問題だど信じやうとも、斯の如き差別は單に外見的なものに過ぎない。何故ならば兩者は同一の價值法則に歸着せしめらるゝから、即ち夫に従へば商品は夫が他人に對して使用價值たる時に始めて交換價值であるとの法則に歸着せしめらるゝからである。

(註) 『若し……個々の商品の場合、使用價值は商品が夫自體欲望を充足すると云ふ事に依存してゐるとすると、社會的生產物總體の場合は、夫が各特殊の生産物に對する量的に一定せる社會的欲望に等しく、從つて勞働は量的に書き直されてゐる社會的欲望に比例して種々なる生産部門に比例的に分配されてゐると云ふ事に依存してゐる』(『資本論』第三卷第一冊一七五頁及び一七六頁)

故にマルクスが偶々、生産物總體に就て行はれる價值法則を研究せる『資本論』第三卷に於て價值決定的、社會的に必要なる勞働時間を定義して、『與へられた社

會的生產條件の平均の下に市場に存在する商品種目の社會的に必要なる全量を生産するに要する』(註)勞働時間であるとするならば、斯の社會的に必要なる勞働時間の定義は、單に個々の商品の價值を研究して、社會的に必要なる勞働時間とは、社會的生產條件の與へられたる平均の下に『何等かの使用價值』を作出するに必要なる勞働時間を意味すると云へる『資本論』第一卷の定義と完全に照應してゐる。社會的に必要なる勞働時間の最初の定義に於ける『社會的に必要なる全量を生産する』なる言葉は此の概念の第二の定義に於ける『何等かの使用價值を作出する』なる言葉と毫も異なる所なく、そして『資本論』第一卷に於ける社會的に必要なる勞働てふ概念の定義から、マルクスに従へば使用價值も價值決定的要素を成すとの結論を引き出し得ないと同じく、第三卷に於ける同一概念の定義から社會的欲望が價值決定的であるとの結論を引き出す事も出来ない。第二の場合に於ける如く、第一の場合にも、吾人は既に示したと信するが、使用價值は凡ての價值

の前提であるてふ法則が云ひ現はされてゐるに過ぎぬ、併し價值決定的なるは前の場合後の場合を通じて唯一つの技術的要素、商品に含まれてゐる技術的に必要な労働のみである。

(註) 『資本論』第三卷第二冊一八〇頁

マルクスは是等二個の要素——價值決定的なる技術的要素と欲望要素——を『資本論』の全三卷を通じて、就中併し第三卷に於て、夫等のもの、商品の價值に對する意義を顧みて極めて嚴密に區別してゐるので、どうしてその『資本論』第三卷がマルクスは欲望要素を價值決定的要素と解するのだと云ふ考へに資したなどと云はれるに至つたか、吾人の觀る所では次の如き事情が斯の如き誤謬を惹起したらしいが、若し然らずとすれば全く驚歎せざらんとするも得ないであらう。

供給と需要の關係と云へば、市場に存する生産物の量と是等の生産物に對する社會的欲望との關係と解するのが常である。生産物が精密に社會が買ひ得る丈生

産せらるれば、需要と供給とは一致する、そして反對に、生産物が社會の必要とするよりより大なる或はより小なる量に於て生産せられると需要と供給は乖離するに至る。需要供給の同じ關係は併し別様にも表はされ得る、即ち労働時間に依つても表はされ得る。生産された生産物の量は社會が生産物の作出に費した労働時間に由つて表はされ得る、是等の生産物に對する社會的欲望は——社會が夫に對して支拂ひ得る労働時間で現はされ得るそして是等労働時間の量の間關係は需要供給關係を成すのである。

『労働の生産力の與へられた基礎に基づいて各種の生産部門に於ける財貨一定量の作出は一定量の社會的労働時間を要する、假令種々なる生産部門間に於ける關係が異り、斯の如き財貨の有用性或はその使用價值の特質と何等内面的關係は無くともさうである。他の一切の事情を等しくすれば、或る種の商品a量がb労働時間を値ひするならば、na量はnb労働時間に値ひする』(註)。斯の如く一定量の

財貨の作出に費された一定量の社會的勞働時間は（勞働の生産力の與へられた根據は既に豫め考慮せられたが故に、）斯の如き生産物の市場價值を成す、同時に併し夫は斯の如き生産物の供給を表はすものである。

（註）『資本論』第三卷第一冊一六六頁

『更に、社會が欲望を充足せんと欲し、此の目的の爲に財貨を作出したと主張する以上、社會は財貨を購買せねばならぬ。實際、商品生産に於ては分勞が前提されてゐるが故に、社會はその生産に自己の處分し得る勞働時間の一部分を投じて是等の財貨を購ふ、即ち與へられた社會が支配し得る勞働時間の一定量を通じて是等の財貨を購ふのである。分勞の爲に一定財貨の生産にその勞働を投ずる任に當つた社會の一部分は、彼等の欲望を充足する財貨に表はされた社會的勞働を通じて等價を受けねばならぬ。』（註）社會が一定生産物の購買に費し得る勞働時間量が是等の財貨に對する需要を形成する。

（註）『資本論』第三卷第一冊一六六頁

斯の如き社會的勞働時間の一定量が生産物の作出に事實上費消せられたとして一定の生産關係の下に於ては必ず費消せられねばならなかつた量に照應するならば、需要と供給は一致し、生産物はその市場價值で、即ち生産物中に含まれた社會的に必要なる勞働に正比例して賣られる。『併し一方に於て社會的財貨に費された社會的勞働の全量と、換言すれば、社會が斯の如き財貨の生産に使用する所の全勞働力の可除部分と即ち此の財貨の生産が全生産中に於て占むる範圍と他方の、社會が一定の財貨に由つて醫される欲望の充足を要求する範圍との間には何等必然的關係はなく、單に偶然的關係が存在するに過ぎない』（註一）。その結果は次の如くならざるを得ぬ、即ち需要と供給は往々にして一致せず、生産物は市場價值の上か下かにある一の市場價格で賣られねばならぬと云ふ事である。『假令各財貨或は或る種の商品各一定量が單純にその生産に必要な社會的勞働を含ん

であり、此の點から見て此の種の商品全體の市場價值は單純に必要な労働を表はすとすも、一定の商品が社會的欲望を正しく超過する量に於て生産せられてゐたら、社會的労働時間の一部は浪費せられており、然る時該商品總體は市場に於て現實に商品に含まれてゐるよりより少量なる社會的労働を代表してゐるのである。……従つて此の商品が市場價值以下で賣り放たねばならぬとすれば、商品の一部分は全然賣却し得ざるにさへ至る事がある。併し、若し或る一定種類の商品の生産に費された社會的労働の量がその生産物に依つて充たさるべき特殊な社會的欲望の量に對して餘りに小なる時は全く逆である。(註二)従つて商品がその市場價值で賣らるべきならば、『或る一定財貨の生産に費された社會的労働の量は充足せらるゝ社會的欲望の量に』照應せねばならぬ。(註三)

(註一) 『資本論』第三卷第一冊一六九頁

(註二) 同一六六頁及び一六七頁

(註三) 『資本論』第三卷第一冊一六七頁

此のマルクスの言葉は商品の價格に對する欲望要素の影響に關して嚮に述べた事から當然推知し得らるべきものである。唯その間に於ける區別は、前には需要と供給との關係が物財の關係即ち一定の、市場に存在する生産物の量と社會によつて必要とせらるゝ同じ生産物の量との關係として表はされたに反し、夫が今は労働時間の關係として、生産物の作出に費された労働時間とその生産物を社會的欲望に照應する量に於て齎すが爲に必ず費さねばならなかつたであらう労働時間との關係として現はれるのである。

斯の如き區別は排他的に形式に係はらしめられ、事柄の本質そのものには毫も關係ないに相違ないが、正に記述の外形がマルクスが斯くまでも誤解された事に與つて力があつた限りに於て重要である。

實際、需要供給關係の労働時間の關係としての記述は、マルクスに於て二個の

異つた概念に對して同一の稱呼而も「社會的に必要なる労働時間」なる稱呼を持つと云ふ結果を惹起した。マルクスは「社會的に必要なる労働時間」なる言葉を以て先づ商品の生産に技術的に必要なる労働時間を表はし、夫から第二に社會がその各種の生産物に對する欲望を充足する爲に必要とする丈の生産物を生産する爲に各種の生産物に對して使用するを要する労働時間量を表はすのである。(註)之は稍くもすれば多くの人々の信するが如く、同一概念の二つの異つた定義ではなく、却つて二個の異つた概念に對する同一の名稱である。

(註) 『夫は特別な財貨の生産に——特殊な財貨に對する社會の特殊な欲望の充足に必要な労働である』『資本論』第三卷第二册一七五頁)

マルクス自身は厳しく是等二種の社會的に必要なる労働を區別する。彼の見解に従へば、既に述べた如く、同一の商品が同時に一の意味に於ては社會的に必要なる労働であり、他の意味では社會的に必要なるより以上か或は以下かの労働を

包含し得るのである。斯の如き場合は即ち成程商品は標準的生產條件の下に於て生産されたが、此の商品に對する充たさるべき社會的欲望の量を超過するか夫に達せざる量に於て生産された場合に起る。

是等二種の社會的に必要なる労働なるもの、商品の價值に關聯した作用はどうかと云ふに、之もマルクスに従へば非常に異つたものである。技術的意味に於ける社會的に必要なる労働は價值決定的要因であるに對し、比例的なる、量的社會的欲望に照應する、社會の全労働時間の種々なる生産部門に對する分配の意味に於ける社會的に必要なる労働は商品の價值量に對しては何等の影響も及ぼさないのである。此の意味に於ける社會的に必要なる労働は使用價值たるべき商品總體の價值の前提が、従つて價值の實現が夫に依存してゐる限りに於てのみ價值法則と關係がある丈である。「社會的欲望、換言すれば社會的力に基づく使用價值は種々なる特殊な生産部門に歸屬する社會的全労働時間分を決定するものとして現

はれる。併し乍、既に個々の商品の場合に現はれたもの即ち個々の商品の使用價值はその交換價值従つてその價值の前提であると云ふ事も之と同じ法則に外ならないのである。(註)

(註) 『資本論』第三卷第二冊一七六頁

加之、マルクスは他の場所で明瞭に此の意味に於ける即ち社會的全労働時間の比例的分配の意味に於ける社會的に必要なる労働は價值決定的なる、技術的に必要なる労働とは「異つた意味」を持つてゐる事を宣言してゐる。マルクスを讀むと「異つた特殊の生産部門に費される社會的労働時間分の斯の如き量的制限は價值法則一般の更に一層展開せられた表現に過ぎない。假令必要なる労働時間は此の場合全然別個の意味を含蓄するとするも然り。(註一)夫はその労働時間中獨り斯々量のみが社會的欲望を充足するに必要なのである。その制限は此の場合使用價值を通じて起るのである」(註二)

(註一) 此の文章は元來は點線を附してはない

(註二) 『資本論』第三卷第二冊一七六頁

併し社會的に必要なる労働の二概念の異つた意義に關するマルクスの此の如き明瞭なる論述あるにも不拘、猶是等兩概念はその共通の名稱故に相互に混交せられる可能性が存在した。そして例へばアドルフ・フォン・エンクシュテルンが、マルクスは全く「思ふ儘に」自分の都合次第で價值決定的なる、社會的に必要なる労働を或る時は「社會的に技術的なる條件を以て或る使用價值自體を作出する」所の労働と呼び、又或る時は「社會的に技術的なる條件を以て、交換價值として實現される使用價值……即ちその儘實現される價值を作出する所の労働」と呼ぶと説明するならば、夫は斯の如き二概念の混同に非ずして何であらうか。(註二)又、例へばエドゥアルド・ベルンシュタインがマルクスは商品の價值量を二要素に由つて即ち「有^{ニユツツリツヒカイト}性(使用價值、欲望)」の要素と「生産費用(労働價值)」(註二)の要素

とに由つて決定せしめると云ひ、更に進んでマルクスは「價值決定的なる、社會的に必要なる労働時間の概念に一生懸命に欲望要素をも引き込むだ」(註三)と説明し従つてマルクスの價值法則展開に於て變動する需給關係の抽出は「他の價值決定要素」(註四)の抽出だとするならば、之全くマルクスに於ける是等二概念の混淆に外ならぬであらう。夫のみならず、ベルンシュタインはマルクスは價值決定的なる、社會的に必要なる労働時間の概念に欲望要素を引き込むだと云ふ事の直接の證明の據り所として明に斯う主張してゐる、マルクスは社會的に必要なる労働てふ概念を、「標準的生産技術に依つて一定商品單位を作出するに要せらるゝ労働時間にも用ひれば同時に當該商品を市場に由つて要求せられ、市場に由つて收容せらるゝ量に於て作出するに必要なる労働時間にも用ひる」と(註五)。

(註一) アドルフ・フォン・エンクシュテルン、『マルクス論』五八頁ライプツヒ、一八九六年

(註二) 『社會主義の歴史と理論』三六八頁

(註三) 同前

(註四) 同三六九頁

(註五) 同三六八頁及び三六九頁

却說マルクスが社會的に必要なる労働を或る時は純技術的意味に於て用ひ又他の場合はその社會的欲望に適合する意味に於て用ひてゐる事は如何にも間違ひない、併しアドルフ・フォン・エンクシュテルンやエドアルド・ベルンシュタインが看過してゐる事はマルクスに於ける是等二個の社會的に必要なる労働の定義は又内容としても並にその價值決定に於ける役割から云つても相互に異なる二概念に照應してゐると云ふ事である。

ベルンシュタイン自身がマルクスは「必要なる労働時間を第三の關係にも用ひる」(註二)而も労働日中労働者が彼の労働力の價值を再生産する部分の名稱として用ひると云ふ前掲の文句を指摘してゐるのは——尤もとは云へ之には斯の如き第三のマルクスの必要なる労働の定義は「今(マルクスの價值法則を論ずるに際し

て)最早や氣に病むには及ばない」(註二)との脚註があるのであるが——注目に値ひする事である。併しマルクスが「必要なる労働」なる表現を種々の概念に使用したと云ふ事情は却つて價值形成的にして價值決定的なる社會的に必要なる労働の研究に際しては、種々なる概念を單に夫等の共通なる名稱の故に相互に混淆しない爲に益々慎重なる態度を採らねばならぬと云ふ事に特に注意を促すべき筈であらうに。

今迄云つた事を約言すれば斯うなる。

(一)價值決定的なる社會的に必要なる労働時間はマルクスに従へば、一定の生産條件の下に於て何等かの商品を現出するに技術的に必要なる労働時間である、従つて欲望要素は價值決定的労働時間中には價值決定的要素として含まれてゐない。

(二)社會的欲望は商品の價值に關しては使用價值より以外の如何なる役割も演じ

ない、従つて單に價值實現の前提に過ぎない。

(三)價值決定的なる社會的に必要なる労働時間とマルクスが社會が各特殊の生産物に對するその欲望を充足する爲に夫の生産に費さねばならぬ労働時間量とする社會的に必要なる労働時間とは區別せらるゝ。此の社會的に必要なる労働時間は労働時間の形式で表現された社會的欲望に過ぎない、従つて又商品の價值に對しては社會的欲望と何等異つた役割を演ずるものではない。

(四)「資本論」第三卷出現後多數の人がマルクス自身も欲望要素を價值決定的要素として承認してゐるとの見解を抱懐するに至つたのは全く是等二種の社會的に必要なる労働時間の混淆に歸着せしめる事が出来る。

*

*

*

*

然らばラッサールは如何。彼は價值決定的なる社會的に必要なる労働を如何に解したであらうか。

『労働は活動なるが故に運動である。所で運動の一切の量は、時間である。』(註一)
 『一切の價值を労働量にして之を更に労働時間に融解する——之は、リカルドを通じて市民的經濟學に由つて既に齎されてある赫々たる最高の功績である』(註二)
 『一切の價值は生産物の作出に要せられた労働時間に融解せらるゝ。』(註三)之即ちラッサールに於ける價值の一般的定義である。斯の如き『労働時間』が社會的なる平均労働時間としてのみ價值決定的なる要素として問題になり得る事はラッサールに於ては當然自明の理であるに過ぎぬ。蓋し、個人的不熟練は何等の經濟的抗辯を形成せず、各人は夫の原則に従つて(リカルドの労働價值論の原則に従つて)生産物の完成に要せられた標準的なる労働量の支拂のみしか要求出来ない事は爾來何人にも分り切つたことだつたからである』(註四)故に、ラッサール謂へらく、労働價值論の不堅實性を證明する爲に、例へば『パン焼屋が粉捏を失敗するならば、不熟練労働者は二日の労働生産物を作出するに八日を要したりするかも知るか、』

知れぬ』(註五)とか云ふが如き兒戲に等しい例を持ち出す者があるならば、笑止極る。凡て斯の如き抗議に對しては『客體の作出に必要なりし標準的労働量(費用價格)のみがその價值の尺度を成すのだ』(註六)と云つて報ゆる事が出来る。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一五八頁

(註二) 同前

(註三) 同一五九頁

(註四) 同一四六頁及び一四七頁

(註五) 同一四六頁

(註六) 同一四七頁

之に反して、ラッサールには労働價值説に對して偶々擧げらるゝであらう他の抗議の方がより眞面目なるものの如くに映づるのである。労働價值説に對する斯の如き注目すべき抗議とは、ラッサールに従へば、三個在る。

『今日例へば何等かの發明或は方法の極く瑣細な改良に由り費用總額に於て從

つて或る客體を作出するに必要な労働量に於て多少著しい減少が起つた場合は、貯藏中の同種の生産物は總て同じ價格の減少を被る。生産者達が今度の價格は彼等の費用價格以下に、即ち從來而も昨日まで標準的に、そして必然的に此の生産物に固定せられねばならなかつた労働量以下になるかも知れぬと躍起になつた所が徒勞である。何等の故障なく生産物は今日の價格で、よしんば夫が生産物に固定せられた労働量の半分であつても、夫で賣られねばならぬ。』

『斯くても猶ほ』、ラッサールは自ら問ふて曰ふ『吾人は或る客體を作出するに必要な、標準的労働量(費用價格)が價值の尺度を成すと云ひ得るであらうか』。『或は、之は通常時々起る事であるが、或る期間の趣味や欲望に變化が起つた場合を假定せよ。今迄嗜好や欲望に適應した諸客體は夫等のものに固定せられたるとして必然的に固定せられた労働量にも拘す、忽にして瓦樂多ガラクタに變はり、そして云はゞその戰ヒビの入つた存在の悲しい血路を古道具に求めるに至る』

『或は嗜好や欲望に於ける斯の如き變化が起らなくとも、近代的生産不斷の運命であるが、或る財貨に生産過剰が起つた場合、又或る一人の生産者の責に歸する事は出来なからうが、ヨーロッパ及びその周圍の世界各地に於けるその競争者が彼が豫測し得たより以上に生産した場合、そして假令斯の如き客體に對する欲望や夫の作出に必要な労働が少しも減じなくても、總て是等の生産物が恐らくその費用價格の半分に下落した場合は、有用にして且つ必然に夫等のものに固定された労働量の半分で捨賣りされざるを得ない』

ラッサールは再び問ふて曰ふ『斯の如き現象に對しても客體に固定せられた労働量はその價值の尺度であるてふ原則を確立する事が果して可能であらうか』(註)

(註) 『ラッサールの講演及び論文集』一四七—一四八頁

その答へは曰はく、然り、労働價值説は以下の事さへ顧慮するならば飽くまで之を確説する事が出来る。即ち

(一) 價值決定的勞働時間は、個人的に非ずして普遍的に、社會的勞働時間と解すべきである事、斯の如き勞働時間にして始めて『生産物に凝固せる量の測度』(註)を成すものである事、そして

(註) 同前掲書一六〇頁

(二) 凡ての交換價值の前提は他人に對する使用價值たる事。『余が現出する使用價值は夫が他人に對する使用價值、他人に對する有用物に變づる場合にのみて交換價值である』(註)

(註) 同前掲書一五九頁

蓋し、ラッサールの考へに従へば、是等の二點を念頭に置いて置けば、上段に述べた外見上の難點が勞働價值論に由つて如何に解決されるかは容易に理解され得る所であるからである。

『或る人が或る客體の作出に悉く勞働時間に融解され得る標準的に必要なる生

産費用を投じた所が、一朝起つた新發明に由つて斯の如き生産が低廉となり、生産物をその費用價格の半値で投げ賣りするの餘儀なきに至つたとしたならば』(註二) 夫は全く簡單に斯う云へば説明出来る、即ち『現に當該生産物に固定されておりそして當時必然に固定されねばならなかつた人間の個人的勞働は成程依然として同じかも知れぬが、併し、社會的勞働時間——物財とはその凝結を表はすのであるが——は、收縮したのだ、更に一層凝結したのだ』(註二) 斯の最初の難問は故に全く簡單に、勞働價值論に従へば商品の價值は商品に含まれた個人的勞働に非ずして夫に含まれた社會的に必要なる、而も技術的意味に於て社會的に必要なる勞働に依つて決定されると云ふ事に由つて解決される。故に斯の如き場合は、生産物は低き價格で賣られるを要する、蓋し發明の爲に商品の價值そのものが下落したからである。此の場合の價格變動は常に價值法則に矛盾せざるのみならず、却つて價格は直接價值を標準に、商品に具體化された社會的に必要なる勞

働に従つて測られるのである。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一六一頁

(註二) 同一六一—一六二頁

次に、『或る財貨に於ける嗜好の變化或は生産過剰の結果生産物がその必然的費用價格より遙か以下で投賣りせられねばならぬか或は全然賣れ残る場合も、凡てが今や労働時間の理論とよく調和する事が判る。何故かと云ふに、商品は今や最早貨幣への「決死的跳躍」を爲し得ないからである、蓋し嗜好が變化した今はその商品には一般に最早社會的労働が現はれてゐないからである、即ち夫は最早使用價值なく従つて交換價值ではないからである』(註) 即ち斯の第二の難點も凡て交換價值は何よりも先ず使用價值であらねばならぬとする價值法則第二の前提が此の場合——嗜好變化の場合——は當てはまらぬ事になり難點自身に由つて解決される。商品が全然使用價值でなければ、然らば交換價值としても實證せられ得

ないのは勿論である。商品に含まれた社會的に必要なる労働は従つて全然問題にならない。

(註) 同前掲書一六二頁

ラッサールは續けて——『夫から物財の剩餘量に關聯する生産過剰の場合も同様である。人間社會に於て例へば一百万エレの絹布が必要でありそして企業家が五百万エレの絹布を生産した場合、彼等は個人的労働時間を多量に消耗したに相違ないが、商品絹布に附着せる社會的労働時間は増しはしなかつたのだ、蓋し總ての個人の絹布中の労働に對する實際の需要は増さなかつたからである。今や従つて五百万エレの絹布中には嚮の一百万エレの絹布に於けると同量の社會的労働時間しか附着しゐないのであつて、その結果は此の特殊なる絹織労働を含む五百万エレをその良心たる社會的労働の存在——貨幣——と對比する時その償ふ所は前の一百万エレと變はる所はない』(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一六二頁

之ぞ非常に喧しかつた五百萬エレ絹布の例で、本書第一章に於て述べた如く、ラッサールの社會的に必要な労働の概念は欲望要素を夫自身に藏しており従つて欲望要素はラッサールに於ては價值決定的要因と見做されると云ふ事を證明せんと欲する者の全てが據り所とするものである。

成程、此の例の前後の脈絡を取り外して夫丈を觀察すると、此の例に由つて、ラッサールの價值構成要素は欲望要素を包藏してゐると云ふ事許りでなく、ラッサールの價值定義は偏へに全く此の要素に依頼してゐる事すら證明出来る。併し、單純に前後の脈絡から撰ぎ取られた個々の文句内至例を據り所とせんとするならば、如何なる著者に對しても、就中一般に經濟的概念定義の精密に關しては多くの希望すべきものを残したラッサールに對してはどんな事でも證明出来るであらう事は餘に判り切つた事實である。従つて、例へば、企業家が社會は一百萬エレ

しか必要とせざるに五百萬エレを作出したと云ふ場合に、彼等は、『多量の個人的労働時間』を徒費したんだと云ふが如き表現は極めて不適穩であり紛ぎらばしい事を承認せねばならぬ。何故かと云ふに、若し企業家が每一エレの絹布の生産に對して技術的に必要な労働時間のみしか投じなかつたとすれば、或はラッサールの言葉を藉つて、『標準的に必要な生産費用』のみしか投じなかつたとすれば——そしてラッサールは彼の例に於ては勿論此の事を考へてゐたのだが——企業家は過剰なる『個人的』なる労働時間に非ずして、全く過多なる社會的労働時間を徒費したのだ。夫を今『社會的労働時間』なる表現の代りに『個人的労働時間』なる表現を置いて見ると、宛も技術的に必要な労働一般は何等價值決定的なる要素に非ざる如かのき印象を喚起し易い。と云ふのは、ラッサールに従ふも社會的労働時間が獨り價值決定的であるからである。併し斯の如き結論は表向にはラッサールの價值法則と矛盾するかも知れぬ。即ち斯の如き表現丈でもラッサールが

完全に誤解されるに十二分であらう。併し乍以上述べた所に依つて下し得らるゝ結論は、ラッサール流價值定義の眞の本質を認識せんと欲するならば、斯の如き絹布五百萬エレの例は夫許り觀察せずに斯の主題に關する彼の一切の論述と關聯して觀察すべきであること云ふ事に外ならない。併し斯の如き疑の餘地なき措置に異議を挾んでも、ラッサールが生産過剰に由つて惹起された價格變動をば嗜好の變化に依る生産物の價值減少と同一の原因に歸着せしむる（『そして物財の超過量に關聯する生産過剰の場合にも同様である』）事や、斯の原因は使用價值たるべき交換價值の前提の缺如である事や、ラッサールが新しき發明の移入に由つて發生した最初の表見的なる困難の解決に際しては、舊來の生産關係下に生産された生産物は『その費用價格』の半値で投賣りされなければならぬなどと云つてゐ乍、一方嗜好の變化又は生産過剰の場合も生産物は『その必要なる費用價格以下にて』投賣りされると云つてゐる事や、最後に、ラッサールに取つて『必要なる費

用價格』乃至『必要なる生産費用』は『生産物の作出に必要な労働時間、量の實際的表現に過ぎない、換言すれば、商品の價值そのもの、實際的表現に外ならぬ事を順次觀察したならば、惟ふに、凡て是等の事を考察したならば、ラッサールの五百萬エレの絹布に關する例が如何に解せらるべきかに就ては最早寸毫の疑問も存在しないであらう。若し各絹布一エレが標準的なる生産條件の下に於て生産されたのであるならば、絹布五百萬エレの絹布も皆夫が生産に社會的に必要なる労働時間を含んでおり、従つて商品の價值を形成するものは獨り此の労働時間である。併し是等の五百萬エレの中一百万エレに對してのみ夫等が使用價值である。ふ前提が該當するが故に、他の四百萬エレの價值は實現し得られず、その結果は流通行程に於て凡ての生産物は、僅に一百万エレの價值に照應する價格で賣られなければならぬ事になる。絹布一エレは従つて少くとも四分の一だけその價值以下で或はラッサールの言葉を藉れば、その『必要なる費用價格』以下で賣られる。

従つて生産過剰が惹起する所のものは生産物の價格と價值との乖離に過ぎない。併し此の乖離は、勞働價值法則に従へば生産物の價值は此の生産物が何よりも先づ使用價值であり而も他人にとつての使用價值たる場合に限り顯現し得ると云ふのであるからその限りに於ては決して勞働價值法則と矛盾しない。併し生産過剰の場合は、生産物の一部が不用になり、従つて該生産物に含まれた社會的に必要なる勞働の一部は實現し得られず、従つて市場に於ける一切の生産物は生産物に事實上含まれてゐるよりも少量の社會的勞働を現はす事にならざるを得ないのである。價值法則と生産過剰に由つて惹起された價格の變動との斯の如き關係を證明する事は、惟ふに、ラッサールが彼の絹布五百萬エルの例を以てして始めて遂行し得た目的であつた。

之、蓋しラッサールが第一の場合、即ち新發明の移入の場合生産物の價格下落を商品の價格と個人的費用價格との乖離（と云ふのは、此の費用價格が之より嚮、即ち發明前に『標準的に必要なる』）として必然的であつたならば、發明後は必然的でなくなつたからである。従つて新規の價格は生産物の個人的費用價格とは異つても、必要な費用價格即ち生産物の價值とは乖離しないから）と呼び、之に反し第二、第三の場合は——嗜好の變遷或は生産過剰の場合——之を價格と必要な費用價格即ち生産物の價值との乖離と呼んだ所以である。

併し此の喧しい問題に關する最も安全なる説明を與へ得るものはラッサールの價格論である。蓋し、假にラッサールは欲望要素を價值決定的要素と解すると云ふのが正しいければ、斯の如き彼の見解は、さうする時必然に價值と價格は少くとも或る程度迄一致する事を假定せざるを得ない以上、彼の價格論に必ず反映せらるるであらうからである。何故なれば、若し價格が需要供給關係に由つて決定されるならば、他方同じ需給關係は亦生産物の價值に影響するからである。故に需給關係に由つて惹起された價格の變動には價值の變動が必ず照應するに相違な

いし、是等兩側の變動は又夫で價值と價格との關係が或る程度に於て靜的狀態に止まる結果を惹起するに相違ないからである。

併しラッサールの價格論に於ては總て是等の事に就ては何にもものをも見出すを得ない。商品の價值は、ラッサールの見解では商品の『必要な生産費用』に由つて定まる、換言すれば、ラッサールに従へば、上と同じ意味であるが、『一切の生産費用が融解せらるゝ所の』(註二)商品の生産に『必要な労働時間量』に由つて定まり、之に反して需要と供給とは單に商品の市場價格を決定するに過ぎぬ。その結果は勿論價值と價格は直接一致しない、従つて市場價格の法則は過多と過少の間、買手の損害と賣手の損害との間を絶ず動搖するにあると云ふ事になる。(註二)生産物の價格はマルクスの見解と同じく『結局』(註三)商品の價值に由つて決定される、と云ふのは、自由競争の爲に資本は常に市場價格が價值を超ゆるが如き生産部門に投せらるゝからである。夫に由つて需給關係は規律せられ、その作用も

結局止揚せられる。そして夫に由つて初めて價值法則は商品價格の決定に際しても唯一の準繩となるに至る。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一九四頁

(註二) 同一六三頁

(註三) 同一四〇頁

『生産物に必要な労働時間量は従つて眞の價值測度計にして尺度であり、市民的生産の良心である、縦し斯の如き良心は……常にその毀損に由つてのみ、市場價格の靜止する事なき動搖に於てのみ、その絶えざる過多と過少に於てのみ表はれるとするも夫に變りはない』(註)。斯の如き言葉を以てラッサールは彼の價格論の記述を結んでゐる。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』一九四—一九五頁

ラッサールは、労働價值論に表見上對立する諸難題解決の方法に關する彼の論

述は先づ彼の價格論を考慮に入れて然る後初めて正しく理解され得るものなる事を彼自身よく看取してゐた。そこで彼は云つた、『余は今から夫の表見的難問はリカルド流價值原則に従つても排除せられる事の簡單な證明に取りかゝらう、尤も斯の如き證明はその本來の形式に於ては自由なる競争及びその下に行はれる市場價格の法則の展開に於て初めて行はれ得るであらうけれども』(註)。

(註) 同前掲一五八頁

そして實際ラッサールが初めにその價格論を展開して、如何にすれば夫の諸難題が勞働價值説に従つて排除し得るかてふ證明を彼のその價格論と關聯せしめてゐたらうならば、彼の註釋者に由つて斯く迄誤解されるが如きは起り得べくもなかつたであらう。惟ふに、吾人は、ラッサールに従へば、生産物は需要と供給が一致する時にのみ、換言すれば、需給の作用が止揚せらるゝ時にのみその價值で賣られる事を知つてゐるからである。然らば需要と供給は價格と價值との乖離に

對してのみ影響し得るので、商品の價值量自身には影響し得ない、換言すれば、ラッサールに従へば、欲望要素は何等價值の決定要素でない事は明白である。

*

*

*

*

併しラッサールに従つてもマルクスに従つても商品の生産に技術的意味に於て社會的に必要なる勞働のみが價值決定的であるならば、従つて此の點に就てはマルクスとラッサールの見解に何等區別が存在しないとするならば、茲に初めて抑もラッサールは果して何の點でマルクスの價值論を誤解したのであらうかと云ふ問題が問題として残る。とは云へ、吾人は斯の如き吾人本來の主題に立ち戻るに先立つて最一度マルクス自身に於ける社會的に必要なる勞働概念の新しい觀方が到達した結論を指摘して置き度いと思ふ。

斯の如き新しい勞働概念の觀方は就中ラッサールに對する諸々の批難が必然に段々緩やかになつて來る事態に到達した。彼は實にあれ程マルクスの信奉者達を

悩ましたマルクス價值論に於ける最大の難點を、僅に『經濟學批評』を知つてゐたに過ぎないに不拘、正しく理解した最初の人間であつたのだ。

そこで例へば、エドゥアルド・ベルンシュタインはその『バスチアーシュルツェ』の序言に於て、ラッサールの價值論に關して次の如く述べてゐる。「價值量及び價值實體に關するラッサールの個々の誤解は彼がマルクス價值論の根本思想を正しく把握しそして洵に明快に之を觀察した事を妨げるものでない」と(註)。如何にもベルンシュタインは吾人に『ラッサールの個々の誤解』が何の點に存するかに就ては何も云はなかつたが、夫が彼には全然第二義的の性質のものに思はれた事は斯の序言からして容易に看取出來る。實際之に依ると殆んど宛もベルンシュタインは是等の『個々の誤解』もマルクスの『資本論』第一卷に於ける評註に對する顧慮からしか考慮しないかの如き印象が與へらるゝのである。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一四頁

他のものは更に數歩を進めて、躊躇なく、マルクスは此の天才に對する純粹なる猜疑心から實際はありもしなかつた誤解をありとしてラッサールを批難したのだと云つてマルクスを責めるものもある。

用心深いものは又是等の問題一般に立ち入る事をしない。プロフェッサー・カル・ディールも國家科學辭典に於ける『フェルヂナンド・ラッサール』なる論文に於て、唯マルクスとラッサールの價值論は似通つてゐるに不拘『決して同一』でない事を指摘するのみに甘んじて唯一個の區別上の標識さへも舉げてゐない。彼の觀方の是非に對する充分なる證據となつたのは既に屢々述べたマルクスの『資本論』に於ける評註である。

マルクス價值論とラッサール價值論との間の差別に關する問題に新しい解決を與へる最初のそして同時に唯一つ注目に値ひする企圖はフランツ・メーリンクから發した。ラッサールのマルクス價值論に關する誤解は一般にラッサールとマル

クスの間に存する『最も深遠なる差異』即ち『法律哲學的觀方と經濟—唯物論的觀方との差異』に歸着せしめらるゝ事を何人にも先じて指摘したものは彼であつた。何故なれば、ラッサールがマルクスの價值論から攝つたものは——此のメーリンクの考へは正當である——『彼の法理學的觀方に適つたもの許りだつた。即ち價値を構成する普遍的に社會的なる勞働時間は勞働者に對してその勞働の全收益を確保するが爲には社會の共同の生産を必要ならしむるてふ論證許りだ』(註二)之に反し彼は完全に『使用價値に結果する場合の勞働と交換價値に結果する場合の勞働との區別』(註二)を看過したからである。

(註一) フランツ・メーリンク『獨逸社會民主黨史』第一版一〇一頁

(註二) 同前

是等の簡潔なる文字の中にメーリンクはマルクスとラッサールの價值論の差異を描出してゐるが、縦しんば彼の是等の言説が此問題を十二分に論じ盡したものである。

とは觀做し得ないとするも、彼の偉大なる功績は、實に彼が最初に據つて以て是等兩價值論の間の區別が永めらるゝ唯一無二の正しい方法を指摘したこと存するのである。

第三章 マルクスとラッサールに於ける

價值構成的勞働の特質

勞働を以て價值の唯一の根源となす價值學説は、何人も知れる如く、既にリカルドに發するもので、従つて、マルクスの價值論を斯程に有名ならしめたものが此の學説の一般的形態に於ける定立である筈はなかつた。マルクスの此の方面に於ける破天荒の功績は、寧ろ彼が勞働の價值構成的性質を研究したこと、即ち彼が初めて商品の價值を決定するものは單に勞働ではなく、一定の觀點の下に齎された勞働である事を指摘した點にあつた。

此の場合、マルクスが使用價值並に交換價值としての商品の証争的な性質から出發した事は到底評價し難い意義を持つてゐた、何故かと云ふに、斯の如き指南車に依るに非ずんば、斯の如き驚歎すべき論理的徹底を以て凡ての商品に體

現されてゐる勞働の証争的な性質を抜き出すことは到底不可能であつたからである。

使用價值としての商品が、何よりも先づ種々なる人間的欲望を満足するに役立つとすれば、それは商品が合目的なる生産的活動の生産物であるが故に始めて斯の如き商品の職能を果す事が出来る。「實質的に使用價值の相違として現はれるものは系統的に使用價值を齎す活動の相違として現はれる」(註)。

(註) カルル・マルクス『經濟學批評』カルル・カウツキ編スツットガルト、一八九七年四頁

種々なる人間の欲望は使用價值が相互に質的に異なるが故にのみ之を満足し得るのである。従つてその結果自然的必然性を以て、勞働は夫が使用價值を齎す限り質的に異つたものであらねばならぬと云ふ事になつて來る。

とは云へ、勞働は個別的に異なる活動の産物として始めて質的に異つた特殊なる人間的欲望に適合し得るのである。

更に使用價值の存在は人間的存在の自然條件なるが故に、使用價值を齎す労働なるものも、如何なる時代にも、原始時代にも發達せる資本主義社會にも存在せねばならぬ事は明瞭である。『使用價值の創造者として、有用なる労働として労働は……一切の社會形態を超越せる人間の存在條件である、人間と自然間の新陳代謝を即ち人間生活を媒介する爲の永久的なる自然的必然性である』。(註)

(註) カルル・マルクス『資本論』第一卷九頁

故に使用價值の源泉として、或は同じ事であるが、實質的富の源泉としては労働はその具體的なる、有用なる、質的に異なる且つ個人的なる活動としての性質に於てのみ存在し得るに過ぎない。

労働は斯の如き具體的なる有用なる形態に於ては單に使用價值の源泉たるのみで、交換價值の源泉であり得ない事は、マルクスにとつて最初から當然自明な事であつた。何故なれば、彼に従へば、交換價值は、既に述べて置いた如く『使用

價值の一原子も』含んでゐないからである。價值構成的労働の本質發見の道は自らその方法中に與へられてゐたのだ。

マルクスが價值の本質を認識する爲に商品の使用價值を抽出するならば、彼は論理上必然に價值作出的労働の性質を發見する爲に商品をして初めて使用價值たらしめる所の労働の一定の具體的なる、有用なる形態を無視しなければならなかつた。マルクスにとつて商品が最早机や家や糸や内至その他有用なる物でないならば、然らば商品は彼にとつて『最早又指物労働や建築労働や紡績労働乃至その他一定の生産的労働の生産物でも』なかつたのだ。『労働生産物の有用なる性質と共に夫に現はされてゐる労働の有用なる性質も消え失せる、即ち此の如き労働の種々具體的なる形態も消え失せるのである』。(註)

(註) 同前掲四頁

併し労働の一定の有用なる形態を除外しても、労働が人間労働力一般の支出、

即ち人間の頭腦・筋肉・神經・手足等の支出、一言を以て云へば、抽象的に人間的な
る労働であるてふ標識は依然として労働に残る。斯の如き、人間の労働力の心理
學的意味に於ける支出は、夫が支出された一定の形態に頓着なく、今は只人間勞
働の一切の生産物に共通なるものであり従つて夫等の生産物を相互に交換し得る
ものたらしめる所のものである丈である。従つて斯の如き労働の結晶としてのみ
生産物は又價值、即ち交換價值を現はし得るのである。

斯くしてマルクスは商品生産的労働の証争の性質を發見するに到つた。そして
同一労働は異つた觀點から見る時使用價值か交換價值かを作出する異つた、然り
相反せる標識を示す事を證明した。

(一)使用價值作出労働の標識が、全く當該労働が労働の一定特殊形態であると云
ふ點にあるに反し交換價值作出労働は抽象的に普遍的なる労働である。「種々な
る使用價值は……種々なる個人の活動の生産物即ち個人的に異れる労働の成果

である。交換價值としては是等の生産物は等一無差別なる労働を現はす、即ち勞
働者の個性性が融解せる労働を現はす。交換價值を設定する労働は故に抽象的に
普遍的なる労働である」。(註)

(註) 『經濟學批判』四頁

(二)使用價值を作出する労働が相互に質的に區別せらるゝに反し、交換價值を作
出する労働は單純に量的に相互に異なるに過ぎない。然り交換價值そのものは最初
單に『據つて以て使用價值が相互に交換し得らるゝ量的關係』(註)として現はれ
る。

(註) 同前掲二頁

(三)使用價值を作出する労働は合目的なる、有用なる活動として人間社會の經
濟的發達の程度に關係なく人間社會の凡ゆる時代に固有なるものであるに反し、
交換價值を齎す労働は、『労働の特に社會的なる形態』である。(註二)使用價值の源

泉としての労働は『律法者モーゼス』にも知られてゐたが、交換價值設定的労働、抽象的に普遍的なる労働は先づ、最早自己の使用の爲ではなく、他人の使用の爲に生産せられ、最早使用價值許りでなく、交換價值も作出される經濟秩序の生産物である。そして最後に

(四)使用價值を齎す労働は、使用價值を齎すに際し人間労働以外に自然も少からず協働するが故に夫に由つて齎された富の唯一の源泉と見做され得ないに反し、交換價值設定的労働は夫に由つて齎された富の即ち富が交換價值から成る以上富の唯一の源泉なのである。『商品の交換價值は實に個々人の労働を相互に等一、普遍的なる労働として係はらしむる事に外ならず、即ち労働の或る特殊な社會的形態の客觀的表現に外ならざるに依り、労働は交換價值の唯一の源泉である。従つて夫が交換價值から成る以上富の唯一の源泉であると云ふのは同義語重疊である。自然的素材は何等の労働を含まざるが故に、その儘では何等交換價值でない。

い。交換價值はその儘としては毫も自然的素材を含まないと云ふ事も同じく同義語重用である。』(註二)

(註一) 『經濟學批判』一三頁

(註二) 同一一一二頁

従つて生産物を夫々使用價值としてか或は交換價值としてか觀ると、生産物は或は具體的なる種々なる個人労働の具體化として表はれたり、抽象的に普遍的なる社會的なる労働として現はれる。『一切の労働は一方では生理學的意味に於ける人間労働の支出でありそして斯の如き等一なる人間労働或は抽象的人間労働の特質に於て労働は商品價值を形成する。他方に於て一切の労働は特殊の合目的々形態に於ける人間労働力の支出である。そして斯の如き具體的、有用なる労働の特質としては一切の労働は使用價值を作出する』。(註)

(註) 『資本論』第一卷一三頁

之、商品に含まれた労働の二重性に關するマルクスの研究の成果を要約したものである。斯の如く労働を檢査して使用價値及び交換價値を構成する労働としてのその二重性に及ぶ事をマルクス自ら名付けて『經濟學の知慧がその周圍を旋回する跳躍點』と云つた。(註一)そして彼は自分の功勞を十二分に意識し乍、斯の如き労働の二重性は彼に由つて初めて證明せられた事を指摘した。(註二)古典學派經濟學は——マルクス謂へらく——『如何なる場合にも明白にそして明快なる意識を以て價値に現はれてゐる労働と生産物の使用價値に現はれてゐる場合の同じ労働と』を區別しない。『古典經濟學は勿論事實上は此の區別をしてゐる。と云ふのは、夫は労働を一は量的に、他は質的に觀察するからである。併し労働の單に量的區別は労働の質的統一或は同一を前提する、即ち労働の抽象的人間的労働への還元を前提してゐる事には考へ附かないのである。』(註三)

(註一) 『資本論』第一卷八頁

(註二) 同前

(註三) 同四六頁脚註

更に吾人はラッサールに於て此の重要な點が如何なる状態にあるか、マルクスの『經濟學批判』なる論文の『壓縮された思索抽出物』を復寫するより以外には何事もしなかつたと主張するラッサールに於て如何なる状態にあるかを見やう。

マルクスと同様にラッサールも最早、單純に労働を以て一切の價値の唯一の源泉なりとするを以て、即ち人間労働時間の具體化としての價値の定義を以て満足しない。そして彼も亦斯の如き價値構成的労働時間を如何に解すべきかと云ふ疑問を提出するのであるが、併し彼が價値構成的労働の本質の發見に際して利用した方法はマルクスの方法とは全然別個のものである。價値構成的労働の本質を認識するに、マルクスの如く、個々の商品の使用價値及び交換價値としての職能から出發する事をせず、彼は人間社會に就て二個の異つた時代、使用價値のみが齎

される時代と交換價值のみが齎される時代とを互に對立せしめ相互に比較すると云ふ様な方法を探つた。

『余が働らく』——ラッサールは述べて云ふ——『そしてその限りに於ては、文章の主辭に従へば、一切の勞働は個人的勞働であるもの、如くである。假に余が余の個人的欲望の爲に眞實の有用物、對象を作出したとすれば、一切の勞働は文章の寶辭に従ふも、斯の如き勞働の運動に於て齎される客體に従ふも即ち生産物中に凝集せられてゐる運動量(時間)に従ふも夫は個人的勞働であらう』。語を換へて云ふならば、人間が自己の使用の爲の生産物即ち使用價值のみを作出する時代には、生産物を作出する勞働は個人的勞働、當該生産物中に凝結せられた勞働時間——個人的勞働時間である。『併し斯の如き事は今日そして既に非常に久しい間最早起らないのである。余は寧ろ凡ての他の人々の欲望の爲に、單に余の欲望の爲ではなく作らくのである。余は一年に幾百萬本かの留針を生産する。余は交

換價值を作出するとして他の全ての余が同じ事をする、彼等の作出する交換價值に於て再び他の全ての人間の欲望を生産し、單に自己のものは生産しない』(註二)その結果、商品を生作出する勞働は最早個人的でなく『凡ゆる個人の個人的勞働即ち普遍的社會的勞働である』として商品に具體化せられた勞働時間は『個人的勞働時間ではなく普遍的に社會的なる勞働時間』である。(註二)

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一五九頁

(註二) 同一六〇頁

實際斯くてラッサールは、茲に述べるが如く、使用價值を作出する場合の勞働と交換價值を作出する場合の勞働との區別を爲す。使用價值を齎すものとしては勞働は個人的勞働であるとして夫に由つて凝結せしめられた勞働時間——個人的勞働時間であり、交換價值を齎すものとしては勞働は普遍的に社會的なる勞働でありその勞働に由つて凝結せしめられた勞働時間——普遍的に社會的なる勞働時

間である。

若しもラッサールが最初からマルクスの例に倣つて使用價值及び交換價值としての個々の商品の研究から出發してゐたならば、實に之程迄に進んでゐたのであるから、使用價值を作出する勞働は交換價值を齎す勞働とは全然別個の性質のものである事を洞察し得たであらうし、自ら、一切の商品は同時に使用價值であり交換價值であるが故に、夫に含まれた勞働も、夫が使用價值である限り個人的勞働であり、夫が交換價值を現出する限り普遍的に社會的なる勞働を表はす事に想を及ぼさざるを得なかつたであらう、語を換へて云ふならば、此の商品の証争的特徴からして、ラッサールは彼自身の言説に基づき當然商品生産勞働の証争的特徴を結論に達せざるを得なかつたであらう。併し、既に述べた如く、ラッサールは此の如き結論を下さなかつた。彼の見解を以てすれば、人間勞働は個人勞働と見做され得るが、夫は併し單に、未だ如何なる商品生産も存在しなかつた、一切の

ものが單に自己の爲にのみ生産された時代に限るので、一切の生産が自己の欲望の爲ではなく、他人の欲望の爲に、使用價值ではなく、交換價值を作出する事に向けられてゐる今日ではさう見るを得ない。今や生産物に含まれてゐる勞働或は勞働時間は最早個人的に非ずして普遍的に社會的なる性質のものである。故に、マルクスにとつては現在でも一切の人間勞働は二重の觀點から觀られねばならぬ、即ち個人的使用價值を齎す勞働として及び普遍的に社會的なる交換價值を齎す勞働として觀察せられねばならぬに反し、ラッサールは甲か乙か孰れか一つしか知らない即ち使用價值を生産するか従つてその場合の勞働は個人的勞働であるか、交換價值を生産するか従つてその場合の勞働は普遍的に社會的勞働であるかである。併し乍らラッサールが斯の如き結論に到達し得たのは全く、使用價值と交換價值、使用價值を齎す勞働と交換價值を齎す勞働とが彼の研究に於てはマルクスに於けるが如く、同一物の兩面の如くに現はれずして、人間社會の二個の異

つた相互に懸絶せる時代に別々に具體化されたものとして現はれたからであつた。従つてラッサールが、メーリンクの考への如く、『マルクスに導かれて』ではなく、逆にマルクスの方法とは全然正反對の仕方では價值構成的労働の社會的性質を抜き出したと云ふ事情こそはラッサールが商品の中に具體化された労働の二重性を看過した事に與つて最も力があつたのである。

併し問題は夫に盡きない。ラッサールにして一旦商品に含まれた労働の二重性を看過すれば、彼は不可避的に價值構成的社會的労働の本質をも看過せざるを得なかつた。一切の交換價值は夫が、同時に使用價值であり而も他人に對する使用價值である場合に始めて交換價值たり得る事はラッサール自らよく理解してゐた。彼は謂へらく『余が作出する交換價值は、夫が他人にとつての使用價值、享益對象に轉換する場合に始めて交換價值である』(註二)と。併し如何なる交換價值も、交換價值たる事を實證する爲には使用價值であらねばならぬならば、夫は

——ラッサールは斯ふ考へた——交換價值を齎す一般に社會的なる労働が異つた性質のものであり而も『眞實の、(即ち)使用價值、作的労働である』(註二)場合にのみ成功し得ると。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一五九頁

(註二) 同一六〇頁

斯くて、併し、ラッサールは交換價值構成的なる普遍的に社會的なる労働の誤れる定義に由來する第二の誤謬に陥つた。

マルクスが何人にも先んじて價值構成的労働の社會的性質を洞察した事は疑もなく彼が經濟學の爲に克ち得た最大なる功績である。所で、彼は更に價值構成的労働の社會的性質をも指摘したので彼の功績は益々偉大なものであつた。人間は、吾人が人類の歴史を概観し得る限り常に小なり、大なり社會内に生活し労働し來つたが故に、彼等の生産、彼等の労働も常に社會的性質を持つたが、唯その

労働の社會的性質は生産の様式に従つて種々なる特殊なる形式に於て表現された。原始共產主義に於ては各個の労働は直接社會的有機體の一成素の機能として現はれる。中世の自然勤勞と自然給付の時代に於てはその労働の特殊性が労働の社會的羈絆となつた。土地的—家長的産業に於ては凡ての個々の労働は家族の限界内に於ける社會的労働として現はれた。『家族關係は……その分勞を以て労働の生産物に夫獨得の社會的刻印を押捺した』(註二)。そして商品生産時代に於ける價值構成的労働の社會性の特質を成すものは、個別的労働が『その直接の反對の形態、抽象的普遍性の形態を採る事に由つて社會的となる』(註三)と云ふ事情である。併し斯の如き抽象的普遍性の形態を或る一定の個人的労働の所産として直接爾餘の労働と區別せらるゝ所の個別的労働が採るのは、一に全くその労働の、使用價值の源泉を成す所の個人的、特殊的、現實の形態を無視して、その労働を無差別にして一樣なる、簡單なる労働、之を要するに、質的に同一にして従つて

量的に區別せらるゝより外なき労働に還元する事に基因する。換言すれば、個別的労働は抽象的人間労働として始めて抽象的普遍性を採るのである。商品に含まれてゐる個人的労働が無差別なる、一樣なる、抽象的なる人間労働に還元せられて始めて、『個人の労働時間は直接、一般的労働時間として、そして個別化せられた労働の斯の如き一般的性質は個別化せられた労働の社會的性質として現はれる。交換價值に現はれた労働時間は、個人の労働時間ではあるが、他の個人、一切の個人が同一なる労働を齎す限り、即ち或人が一定商品の生産に要した労働時間、爾餘の各人が同じ商品の生産に費すであらう必要時間である限り他の個人、一切の個人と區別する所なき個人の労働時間である。夫は個人の労働時間である、彼の労働時間である、併し何の個人の労働時間であるか問題にならぬ一切の共通なる労働時間としてある』。(註四)

(註一) 『經濟學批判』九頁

第三章 マルクスとラッサールに於ける價值構成的労働の特質

一三三

(註二) 同一〇頁

(註三) 同五頁

(註四) 同七—八頁

従つて交換價值構成的勞働はマルクスに従へば、夫が何よりも抽象的人間勞働である限りに於てのみ一般に社會的勞働であるのである。

併しラッサールに於ては之と趣を異にした。成程ラッサールは價值構成的勞働のマルクスに於ける普遍的に社會的なる勞働としての定義を繼承したが、夫は外見がさうだと云ふのでその内容からはさうは云はれないものであつた。何故かと云ふに、ラッサールの意味する一般的に社會的なる勞働とは、マルクスに於けるが如く、商品に含まれた抽象的に人間的なる勞働ではなく、ラッサール自らが定義する所に依ると、一切の個人の「眞實の(即ち使用價值を作出する)個人的勞働である」(註)からである。一般に社會的なる勞働に關するラッサールの斯の如き定義

は併し管にマルクスが與へた定義と矛盾する許りでなく、夫自らにも矛盾を藏してゐるものである。勿論眞實の、使用價值を作出する勞働の主たる標識はラッサールに従つても、その勞働が勞働の一定特殊の形態であり、何等か特殊の内容を有する勞働である點にあるは云ふまでもない、そして斯の如きものとしてはその勞働は勿論異なる個人的勞働でしかあり得ず、決して普遍的なる勞働であり得ず、従つて又社會的勞働ではあり得ないのである。

(註) 「ラッサール講演及び論文集」第三卷一六〇頁

とは云へ、ラッサールの價值構成的なる、普遍的に社會的なる勞働の定義に於ける斯の如き矛盾は之を偶然的なものとして見做す事を許さない。此の矛盾は、ラッサールが凡ての商品に含まれた夫の二重性を看過した事實の必然的歸結であつた。何故かと云ふに、勞働が單に交換價值作出勞働としてのみ存在するものにとつては、夫は抽象的人間勞働たり得ないからである。即ち若し一方に於て價值

構成的實體は一切の交換價值に共通なるものであり、そして交換價值に於て實現される勞働は従つて一般に人間的勞働であらねばならぬとするならば、他方に於て斯の如き普遍的勞働は如何なる場合にも抽象的人間勞働たり得ない、蓋し抽象的人間勞働即ち人間勞働力の單なる支出の單なる生産物として、斯の如き人間勞働が支出せられた有用具體的なる形態に頓着なく、商品は何等の使用價值も表現しないであらうからである。併し使用價值たる事は、既に述べて置いた如く、ラッサールに従ふも、凡ての交換價值の避く可からざる條件である。斯くて交換價值作出的勞働を一方では『普遍的に社會的なる』勞働と定義し、他方に於ては『眞實の、使用價值作出的』勞働と定義する必要のみが、夫自體矛盾を包藏せる定義のみが獨り跡に残るのである。

斯くてラッサールにとつては此の勞働の使用價值作出的勞働及び交換價值作出的勞働としての訂争的性質の看過と價值構成的實體の性質の誤解とは離る可からざるものであつた。併し、若し斯の如きマルクス價值論の主成分を無視するならば、尤もラッサールは夫を繼承することに由つてリカルドの價值論を擴大したと信じたのだが、ラッサールの價值論と古典學派の國民經濟學と果して何處が違ふのか理解されない。價值構成的勞働を普遍的に社會的なる勞働と定義する事に由つてあるか。併し此の定義はラッサールに於ては何等の具體的内容を持たぬ一個の空疏な形式に轉化して了つた。

とは云へ、ラッサール自身は之を自覺してゐなかつた。彼はマルクス價值論を完全に理解したとの確心を抱いてゐた。従つて、ラッサールが、マルクスがその價值論に基づいて下した若干の理論的推斷にも加盟する資格ありと信じて、論理的必然性を以てマルクスの價值論に源を發した是等の推斷が彼の述べた價值論とは正反對に立つ事にちつとも氣が就かなかつたとて決して怪しむを須ひないのである。斯くてラッサールは又マルクスがその價值論を基礎に展開した貨幣論も完

全に收容し得ると信じたが、その場合、斯の貨幣論が彼自身の價值論とは管に脈絡なきのみならず、正しく夫と矛盾撞着するものなる事には氣が附かなかつた。

第四章 マルクスの貨幣論とラッサールの

價值論との矛盾

商品のその使用價值と交換價值への分拆及び労働のその二重性への分拆、即ち使用價值作出労働及び交換價值作出労働としての労働の二重性への分拆はマルクスが更に彼の有名な貨幣論を展開するに對してその根據を供した。斯の如き分拆に據つて初めてマルクスは貨幣の發達が偶然的現象と見做され得ない、夫は寧ろ商品生産必然の歸結である即ち商品と貨幣の對立は使用價值たると同時に交換價值たるべき商品の内面的矛盾の外面的反射に過ぎないが故に交換行程の必至的所産なる事を證明するを得たのであつた。

使用價值と交換價值との統一として商品は夫自體に一系列の矛盾を包藏してゐるが、夫が解決は獨り貨幣構成に由つてのみ説明し得らるゝものである。斯の如

矛盾の一つは、生産物は商品として如何にも使用價值たると同時に交換價值であるが、同時にさうでないといふ點にある。蓋し使用價值並に交換價值は直接存在せず、精々生成的成果を代表するものなるが故である。如何にも商品は使用價值ではあるが、商品使用者にとつてはなく、自己の欲望満足の爲に商品を要する人々にとつてさうなのである。故に使用價值たらんが爲には、商品はその所有者の家から出で、その人々にとつて商品が使用價值である様な人々の掌中に移らねばならぬ、換言すれば、商品は交換されねばならぬ。併し商品は交換價值としてのみ初めて交換せられ得る。商品の使用價值としての必要な實現條件は故に商品の交換價值としての實現である。

所が他方に於て交換價值としての商品は、該商品が使用價值として實現せられる時に始めて實現し得らるゝ。何故かと云ふと、一の商品に具體化せられた抽象的人間労働時間は夫が就中一定の有用なる形態に於て支出された時に始めて普遍的なる、價值構成的なるものとして問題となるからである。使用價值たる事は凡ての交換價值の實質的條件である。故に一方に於て商品の使用價值としての必要な實現條件が商品の交換價值としての實現を前提するならば、逆に商品の交換價值としての實現は就中その使用價值としての實現を前提するのである。

併し使用價值及び交換價值としての商品の讓渡は直徑的に對立せる條件を前提するものである。使用價值としては、商品は、特殊の個人的労働の所産であり、特殊な人間欲望を充す性質を有する所の質的に異なる物としてのみ交換せられ得るが、之に反し交換價值としては商品は抽象的に普遍的なる、等一なる労働の實現としてのみ、即ち商品の使用價值及び商品中に含まれた特殊の個人的労働には頓着なく、相互に交換せられ得るものである。『従つて同じ關係は本質的に等しい、唯量的に異なる量として商品の關係であるべきであり、普遍的なる労働時間の有體性としての商品の等置であるべきであるが、同時に、質的に異つた物としての、

特殊な欲望に對する特殊な使用價值としての商品の關係であるべきである、簡単に云へば、夫等を現實の使用價值として區別する關係であるべきである。(註)

(註) 『經濟學批判』二二—二三頁

更にその上の矛盾は、商品は、既に述べて置いた如く、同時に特殊の個人的労働の所産として及び抽象的に普遍的なる労働の所産として交換行程に入らねばならぬに、夫は直接には個人的労働の所産としてしか現はれ得ないと云ふ點にある。商品は直接には單に特殊な、個人的労働の具體化に過ぎない、そして交換行程に於て吾人が商品中に含まれてゐる斯の如き特殊な個人的労働を無視する時に始めて商品は普遍的社會的労働の所産として現はれる。従つて難點は、『商品は一方では客體化せられた普遍的なる労働時間として交換行程に入らねばならないが、他方個々人の労働時間の普遍的なるものとしての客體化そのものは交換行程の所産に過ぎない』(註)と云ふ點である。

(註) 『經濟學批判』二四—二五頁

是等一切の難點なり、矛盾なりは、同一商品が同時に使用價值と價值、個人労働と抽象的に普遍的なる労働の所産であり、従つて、同時に完全に對立せる職能を執行せねばならぬと云ふ事實の歸結である。

併し如何にすれば斯の如き矛盾は解決し得らるゝであらうか。

夫は自ら解決される——とマルクスの答へは云ふ——而も交換行程に於て、貨幣構成の道程に於て解決される。

既に商品の單純なる價值表現中に此の解決は含まれてゐる。何等かの使用價值、例へば、亞麻布と何等か他の任意の使用價值、例へば、上着と交換せらるれば、既に斯の如き單純なる交換行程に於て既に商品の使用價值及び交換價值としての相對立せる職能は二個の異つた商品に分配せられる。亞麻布は此の場合に直接には使用價值として現はれるが、その價值は商品上着に由つて表はされ、之に

反して上着は單に等價として即ち商品亞麻布の價值を表現する爲の物質として役立つのみである。

併し上着が亞麻布の價值表現として現はれるに於ては、夫は最早使用價值としては現はれないで、價值物として現はれる、蓋し上着は價值物としてのみ初めて亞麻布と等置せられるからである。従つて使用價值上着なるものはその對蹠者、價值の現象となる。(註)

(註) 『資本論』第一卷二三頁

併し今上着が價值物として亞麻布に等置せらるゝに於ては上着に含まれてゐる勞働も亦亞麻布に含まれてゐる勞働に對して兩者に共通なる勞働として等置せらるゝ。併し、共通なるものとして裁ち方勞働が機織り勞働に等置せられ得るは獨り抽象的に人間的なる勞働としてに限る。具體的なる裁ち方勞働は斯くて特殊な有用なる勞働として現はれず、抽象的に人間的なる勞働として現はれる。具體的

勞働は『その對蹠物、抽象的人間勞働の現象形態』となる。(註)

(註) 『資本論』第一卷二五頁

所で具體的なる裁ち方勞働が抽象的人間勞働として現はれると、夫は又同時に一切の商品に共通なる勞働として現はれる。私的勞働から『その反對物に、即ち直接に社會的なる形態に於ける勞働に』なる。(註)

(註) 『資本論』第一卷二五頁

斯くて吾々は既に單純なる價值表現に於ても商品に含まれた使用價值と價值との對立が外面的對立に由つて表はされてゐるのを見る、而も、その現はれるや、その價值が表現せられてゐる當該商品は直接使用價值として、依つて以て該商品の價值が表現せられるその商品は——直接交換價值として現はれるのである。『従つて商品の單純なる價值形態は、商品に含まれた使用價值と價值との對立の單なる現象形態である』(註)。

(註) 『資本論』第一卷二八頁

そして斯の如き、商品に含まれた對立の單純なる價值形態に於ける外面的反射は、商品上着は全く偶然的に商品亞麻布の價值表現となつたものなるに於て、未だ偶然的なものとして現はれるが、單純なる價值形態が貨幣形態に發達するや否や、換言すれば交換行程に於て最早、單純なる價值形態の場合に見るが如く、何等か或る商品が偶然に他の商品の價值表現となるのでなく、商品の系列から、さうした場合の一切の商品が依つて以て各自の價值を表現する一定の商品が除外せらるゝや否や、斯の如き外部的反射は一の繼續的現象となる。

此の爾餘の商品の交換價值を計り、人が名けて貨幣と呼ぶ所の特殊な商品は、如何にも元來は他の商品と同じく商品である、換言すれば、使用價值であり、特殊な個人的労働の生産物であるに相違ないが、交換行程に於て爾餘の一切の商品が夫に依つて銘々の交換價值を測ると云ふ事の爲に、爾餘の一切の商品の等價物

たり、従つて直接普遍的人間労働の存在として、交換價值の存在として現はるべき時に社會的なる職能を取得する。斯くて同一なる商品に具體化せられてゐる矛盾は、交換行程に於て種々なる商品間に分配せられる、而もその分配たるや貨幣の役割を演ずる一定特殊の商品は他の全ての商品に對して交換價值として現はれ、そして使用價值たらんが爲には他の商品と交換せられねばならぬ、自己の交換價值は斯の如き特殊の商品——貨幣——に於てしか實現する事の出來ない爾餘の商品は此の特殊の商品に對しては使用價值として現はれると云ふ風に分配せらるゝのである。

斯の如く商品を交換行程に於て商品及び貨幣に轉化する事に由つて、斯くの如く、商品中に含まれた使用價值と價值との對立を外面的に表はす事に由つて今や此の對立そのものは此の對立と結び附いた矛盾と同様に完全に止揚せられるのである。

『貨幣結晶は』——マルクスは斯ふ書いてある——『種々様々なる勞働生産物が相互に事實上等置せられ、従つて事實上商品に轉化せられる交換行程必至の所産である。交換の歴史的擴大及び深化は商品の本質中に假睡せる使用價值と價値の對立を發展せしむる。交易の爲に斯の如き對立を外面的に表はす必要は商品價値の獨立なる形式にまで進み、此の獨立なる形式が結局商品が商品にもなれば貨幣にもなる事に依つて達せらるゝ迄は止まる所を知らない。だから、勞働生産物の商品への轉化が行はれる程度に正比例して商品と貨幣の轉化が行はれるのである』(註)。(『資本論』第一卷五三頁)

(註) 序に説明するが、貨幣はマルクスにとつては格別に爾餘の商品の如くに商品ではない。成程、或る特定の商品は、夫が元來は爾餘の商品の如くに商品であつたからこそ貨幣となつたかも知れぬが、併し斯の一定の商品が一旦社會的交換行程の結果として貨幣となつて了つたに於ては、夫は他の凡ての商品より以上のものである。就中、マルクスに従へば、貨幣なる商品は、『交換價値の、普遍的に社會的なる勞働の、抽象的富の獨立なる存在のみを表はす商品に對しては抽象的富の物質的存在』である。

(『經濟學批評』一二〇頁) 併し使用價値の方面から見ても貨幣なる商品は爾餘の商品以上のものである、と云ふのは、凡て商品は『特殊な欲望に關連する事に依つて物質的富の一要素しか、富の單純化された一面』しか表現しないに反し、貨幣は、『直接凡ゆる欲望の對象に置き換へられる限りに於て凡ゆる欲望を充足するからである。』貨幣自身の使用價値は貨幣の等價を形成する使用價値の無限の系列に於て實現せられる。貨幣はその堅實なる金屬性に由つて商品の世界に展開せられてゐる一切の物質的富を無制限に受け入れる。貨幣なる商品は故に『物質的富の物質的代表者である。彼は「物財全體の要點」である……即ち社會的富の媒介物である。』彼は個人としては普遍的富である』(『經濟學批評』一二二頁)

マルクスは、貨幣なる商品が宛も夫、自體本質、直接なる交換性の性質を持つてゐるとする見解を斷然排斥した。そして之が機縁となつて宛もマルクスは貨幣を他の商品と同様に商品と觀るかの如く臆測せしめた。併し斯の如き臆測は決定的に誤謬である。惟ふに、マルクスが證明しやうとしたのは、一切の商品の等價物でふ貨幣の特質は貨幣の役割を演ずる是とか彼とかの商品生得の特質では決してない、夫は單に社會的關係の所産に外ならない、そして斯の如きものとしては、斯の如き社會的關係の内に於てしか存在しないと云ふ事に過ぎない。兎に角斯の事實は、貨幣が夫にも不拘他の凡ての商品以上であり得るし、マルクスに従へば又現により以上である事に何等の變化も齎すものではない。此の觀點からすると、マルクスが『經濟學批評』に於て夫の貨幣及び重商制度を比較的にあの位寬大に

論じた所以が判る。彼は即ち重商論者の『唯一の富』としての貨幣追求をば單なる金銀商品への追求と見ず、『交換價値の堅固な、把握し易き、赫々たる形態』即ち抽象的富の形態としての金銀に對する追求と見るのである。何故かと云ふに、『流通の目的としての貨幣は』——とマルクスは考へる——『交換價値或は抽象的富であつて、生産の決定的目的にして人を驅りたてる動機たる富の何等かの物質的要素ではない』からである。〔經濟學批評』一六三頁〕従つてマルクスは此の貨幣及び重商制度を『單なる幻覺として、單なる謬説として白眼視するが、『彼等自らの根本的前提の粗野なる形態たる事を認識せぬ』經濟學の批評に熱心に反對する。(同前)——重商制度に關してマルクスの見解と似通つた見解はアオグスト・オンケン教授もその著『國民經濟學史』中に代表してゐる。

茲に於てマルクスの全貨幣論は彼の商品及びその中に含まれる労働の二重性に關する根本論に依存することが判る。故にマルクスの此の根本理論を承認しないものは、又自然必然的に此の理論から生起する貨幣論に關する推斷に加はる資格がないと考へても差支へないであらう。

今しがた吾人は、ラッサールが誤解したのは取も直さずマルクスの此の理論であると述べた。彼はマルクスが同一の商品内に具體化されておるとした對蹠物を

二個の異つた時代に分配し、商品となる生産物を直接交換價値として、普遍的に社會的なる労働の直接なる生産物として觀る事を以て満足した。併し斯の如き假定を許す時は、マルクスが交換行程に於て初めて貨幣構成を通じて解決せられるとする所の一切の難問と矛盾が自ら脱落し夫に伴ひマルクス貨幣論の基礎も脱落する。

夫にも不拘、ラッサールは次の如くに續けて云ふ。即ち

『併し、普遍的社會的労働時間は貨幣としてその獨立なる存在を持つてゐる。貨幣は、(ピンや木材や亞麻布等に於ける労働の如き)特殊な労働が持つ凡ての個別的性質を脱した、客體化せられた社會的労働時間である。「商品の黄金への命懸けの飛躍」に由つてのみ商品は商品のあるべきもの即ち社會的労働時間たるものが實證される。』(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一六〇頁

『そしてシュルツェ君』——ラッサールには斯ふ書かれてある——『余が今最後に價值の測度としての労働時間の社會的意義並に貨幣に關してお目にかけての説明を御覽下さい、之は、全てその精神的基礎から云つたら、全く、たつた今引用した文字も夫から取つたのだが、或る非常に重要にして卓越なる論文、カルル・マルクスの卓越せる劃期的論文『經濟學批評』から取つたもので、拙文の如きは唯その壓縮した思想、拔萃に外ならないのです』(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』一六〇—一六一頁

ラッサールの普遍的に社會的なる労働時間の獨立なる存在としての貨幣の本質に關する簡單なる記述はマルクスの夫に照應しており、『經濟學批判』から取られたものである——夫は確かに間違ひない。とは云へ、何となく調子の合はない、又合ふ筈もない事は、ラッサールがマルクスの是等の貨幣の本質に關する言説を彼の商品價值の分拆と一致せしめ得た事である。ラッサールが仕たやうに、商品

に含まれた個人的労働を否定し、商品を普遍的社會的労働の生産物として表はすならば、商品が何故に、社會的労働時間の存在として現はれる爲に『黄金への命懸けの飛躍』を敢へてせねばならぬかが理解出來ないであらう。而もラッサールの吾人に示す所によれば既に商品そのものは普遍的に社會的なる労働時間の單なる具體化である。彼は個人的労働は成程、生産物が自己の需要の爲に生産される時代には存在してゐたに違ひないが、生産物が商品として、全世界の使用價值として作出されて獨り商品の所有者その人の爲のみにはされない今日には存在せぬとさへ説明した。故にラッサールが飽く迄その態度に終始したとしたら、彼はマルクスの斷言、貨幣は商品生産物であるてふ斷言を斥け、彼の價值分拆に基いて、商品は普遍的社會的労働の直接なる具體化として、相互に交換せられ得るが爲に補助手段としての貨幣を要しないことを證明しなければならぬ。之は成程夫自體としては誤つてゐるに違ひなからうが、ラッサールの價值論の立場からすれ

ば完全に一貫したものであらう。何故かと云ふに、商品は普遍的に社會的なる労働の直接なる所産なりと假定するものからすれば、苟も商品であれば貨幣であり、従つて夫は宛も夫故に貨幣はなくても差支へないからである。

此の點に於て、マルクスが自身グレーの貨幣論に下した批評はラッサールの貨幣論にも當て嵌まる。商品は——とマルクスは考へる——『見た儘のものとして相互に係はらしめらるゝに過ぎぬ。商品は直接には孤立獨立せる私的労働者の生産物であつて、私的交換の行程に於ける讓渡を通じて普遍的に社會的なる労働たることを實證せらるゝより外なきものである、換言すれば商品生産を基礎とする労働は個人的労働の全面的讓渡に由つて初めて社會的労働となるのである。併し若しグレーが商品に含まれた労働時間を直接に社會的なものとして考へるならば、彼はその労働時間を共同社會的な労働時間として或は直接に結合せる個人労働時間として考へるものである。斯くては、金銀の如き特殊な商品が他の商品に普遍的労働の權化として對立する事はあり得ないであらう。』(註)

(註) 『經濟學批判』七一七二頁

所がラッサールに在つて貨幣が他の商品に對して一般に社會的労働時間の權化として現はれるに對して彼の理由とする所は、ラッサールに従へば貨幣の代表する一般に社會的なる労働時間が爾餘の商品の一般に社會的なる労働時間とは別個の性質のであるものの如く見ゆる點にある如くである。即ちラッサールは一切の商品に含まれてゐる一般に社會的なる労働を定義して『凡ゆる個人の實際的な、個別的労働』とするに反し、彼に依れば、貨幣は『(ピンや木材や亞麻布等に於ける労働の如き)特殊な性質の凡ゆる個別的規制から脱せる、客體化せられた社會的労働時間である、』(註) 言葉を換へて云へば、貨幣はラッサールに従へば、爾餘の商品と異り、マルクスの意味即ち抽象的人間労働の意味に於ける客體化せられた社會的労働なのである。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一六〇頁

茲に吾々は一般にラッサールに於て初めて普遍的に社會的なる勞働が抽象的人間勞働として現はれるのを見る、そして人々は怪しみ問ふであらう、若しラッサールの云ふ如く斯の如き抽象的人間勞働は果して商品に全然存在しないならば、夫は如何にして交換行程に於て獨立化せらるゝであらうかと。吾々がラッサールから教つたことは、商品は成程一般に社會的勞働の所産であるが、斯の如き普遍的に社會的勞働とは『凡ゆる個々人の實際の……個人的勞働に外ならぬと云ふ事であつた。(註)ラッサールは一般に、抽象的人間勞働としての普遍的に社會的なる勞働に就て何等云々する事はなかつた。そして今吾々はその發生に就て何等の説明を聞く事なく、夫が突如として貨幣となつて現はれたのを見る。

斯くて、ラッサールは二様の社會的勞働を區別した、即ち一切の商品に具體化されてゐる實際的社會的勞働とその權化を貨幣が表現してゐる所の抽象的社會的勞働とを區別した事を信づるより以外には何物も残らない。従つて交換行程に於て對立せしめらるゝものは、マルクスに見るが如く、個人的なる勞働と一般に社會的なる勞働ではなく、二重性の社會的勞働即ち現實の社會的勞働と夫自體荒唐無稽なる抽象的に社會的なる勞働である。

斯くて吾々は、如何様に問題を解せんとしても、凡ゆる場合を通じて、ラッサールがマルクスから繼承した貨幣論と彼の商品價値の實體に關する解剖との間には矛盾の生起するを見るのである。そして若しラッサールが夫にも不拘第一の場合にも第二の場合にもマルクスに典據を求め得ると信じたとすれば、之は偏へに、ラッサール自ら、彼が如何に甚しくマルクスを誤解したか、彼の商品價値の解剖とマルクスの夫との間には如何に大なる差別があつたかを自覺しなかつた爲であつた。彼はマルクスの値價論並に貨幣論を簡約の言葉で正しく復寫したと確く信じてゐた。併しマルクスは、既に述べた如く、ラッサールの彼の價值論記述

に不満を感じべき理由を十二分に持つてゐた。

のみならずラッサールは、嘗にマルクスの價值論、と衝突した許りでなく、労働價值説一般とも相背いたのである。

第五章 ラッサールに於ける價值構成

社會的事情

吾々が労働價值論者に對して何よりも要求しなければならぬ事は、嘗に論者が労働價值論を遵奉する許りでなく、又之を微に入り細に亘つて省察し、徹底的に經濟生活の一切の現象をその理論と一致せしめて貫ひ度いと云ふ事である。

是等の要求から出發する時、ラッサールは労働價值論者として希望すべき多くのものを果さずに残した事を認めざるを得ない。労働價值論そのもの、正しさを確信する餘り、彼は皮相にも、あの曖昧な表現や無意味な文句を以て價值論上の最難關をも堂々と突破し得ると信じた。併し夫は決して宛も彼自ら是等の問題を明快に理解してゐせず、夫は又他の問題に就ても常に問題に對する明敏を欠いてゐたものの如くではない。夫は寧ろ、諸問題がラッサールに於て屢々被らされた

曖昧さは問題をあつきり片附け去る單なる手段であつたかの如き印象を與へるのである。

此のことは社會事情が新しき價值及び資本の發生にどんな影響を及ぼしたかと云ふ、疑ひもなく價值論内に於て最も難解なるものの一なる問題の取扱に際して明瞭に看取された。

資本は節約の結果なりとするシュルツェ・デーリッチに對する抗議に於てラッサールは、資本構成は國民經濟的意味に於ても私經濟的意味に於ても節約とは何等の關係が無い事を證明しやうと企てた。國民經濟的資本の唯一の源泉を成すものは生産である、そして私的資本は他人の勞働收益の堆積に依つてのみ成立し得るものであつて、今日では夫を——とラッサールは考へる——『寧ろ掠奪とか或は少くとも搾取とか』とは名付け得ても節約とは名付け難いものである。

例へば、古代、勞働者がその作出した所のものは全部を捧げて主人の財産とし

た奴隷勞働の支配時代でもさうであつたし、中世、農奴及び臣隷が奴隷に代つた時代即ち『最早人間全部ではなくても』、『彼の意志及び彼の意志の特別な活動』(註)が主人の私有財産であつた時代もさうであつたし、一七八九年のフランス革命の後も資本家階級の生産手段私有が勞働者の勞働收益の一部を收得する力を與へるが故に、矢張りさうであつた。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一〇六頁

分勞の進歩に伴れ、技術の發達に於ける進歩に伴れて絶えず人間勞働の生産力は増進するが、ラッサールに従へば勞賃は結局に於ては決して慣習的に必要なる生計を超へ得ないが故に、人間勞働の増進せる生産力は、唯、勞働收益の次第に大なる過剰が企業家に由つて資本に轉化せられる結果しか齎さなかつた。夫迄はその通りである。

今やシュルツェ・デーリッチに最後の「一撃を與ゆべき時である。即ち資本の發生

が『節約』とは如何に關係なきかを最後に證明して見せるべき時である。そしてラッサールは此の目的の爲に次の二つの例を引用した。即ち

『余が土地一筆を一〇萬ターレルで買ふ。余は余の資本の五パーセントを該土地から償ひ、之を年々支出する場合を假想する。故に余は鑑一文も『節約』しない。然り夫所ではない、余は年々余の所得を超へて二千ターレルを支出し即ち費消して、負債を負ふ。併し十年後は余はその土地を賣つて、その十年間に騰貴した穀物内至宅地の價格のお蔭で余は恐らく今やその土地の價格二十萬ターレルを償ふであらう。余は十年間の冗な支出を通じて余が負つた二萬ターレルの負債を支拂ひ、夫でも猶ほ八萬ターレルの新資本を掴むことになる。——ラッサールは質問して曰ふ『此の新資本八萬ターレルは何處から來るのか』。之は全く社會的事情に由つて形成されたのだ。夫は、段々數が倍えて稠密になる人口が同一地表に發生した爲に形成されたのである。今や恐らく、國民の必要なる食料の一定量を

生産する爲に、費用高き収益を生む確なる土地まで手が着けられねばならないと云ふ事や、穀物の市場價格が今や此の確なる耕地に於ける穀物生産費をも償はねばならぬ——夫が余をして此の如き高き價格で余の穀物を賣らしめるに至つた——と云ふ事の爲に形成されたのである。

夫は恐らく乙の人民の富の増進が甲の人民に此の穀物生産物に對する有效なる競争が穀物生産物の價格を引き上げる手段を與へる爲に、或は恐らく、他國に於ける穀物關稅が撤廢されて夫に由つて同じ結果が起る爲に形成された。

之を要するに、夫は是等一切のものに由つて形成されたもので——單に余の勞働や余の『節約』によつてではない。

『或は』——ラッサールの引用した例の第二の例に曰はく——『余がケルンミッデン鐵道の建設に額面通り十萬ターレルの株券に記名したとする。余は、夫以外は何等此の鐵道の爲に心を勞する事なくして年々初めは五パーセント、夫から

八パーセント、十パーセント、十二パーセント、十三パーセントとつ余の投資々本から引出した、即ち眞に巨大なる配當を得たのである、そして余は最後の鏹一文さへも容赦なく支出して了つた。余は今此のケルン＝ミンデン株を賣る、夫は今相場表に依れば一七五であるとして余はいつでも鏹一文でも『余の所得から集めそして節約した』事もなくて、七萬五千ターレルの新資本を擱んだ譯である。』

ラッサールは問ふて曰はく『此の新規の資本はどうして形成されたのであらうか。社會的事情に由つてでせう、シュルツェ君！』

『人間の交通が増加したり、貨物の往來が繁くなつたり、或るイギリスの技師の發明で經營費が段々少くなつたり——要するに悉べて是等の社會事情の爲に此の「ケルン＝ミンデン鐵道」と稱せられる大投資及び従つてその凡ての破片(株式)は現實に夫程大なる資本價值を代表するものであつて、單に余の勞働の爲や余の「節約」の爲では決してない』(註)

(註) 『ラッサールの講演及び論文集』第三卷一六—一八頁

そして最初の場合に於ける、即ち土地の場合に於ける新規の資本構成が社會的事情に由つて惹起された穀物價值の騰貴の結果であつたとすれば、後の場合に於ける、ケルン＝ミンデン鐵道の場合に於ける新しい資本構成は鐵道の價值騰貴の結果であつた。蓋しケルン＝ミンデン鐵道の場合は——ラッサールの考へる所に由れば——『新しい資本價值が有効にそして實際に發生したからである。交通の増加や經營費の減少等の爲に今やケルン＝ミンデン鐵道全體が——夫に伴ひ此の鐵道に對する持分も——實際に價值が増加したのだ』(註)。シュルツェデーリッヂは駁撃された。ラッサールの例は明に資本の發生が節約と何等の關係がない事を示した。併し是等の例に由つて同時にラッサール自身の、宛も資本は生産の方法によるより以外には如何にするも發生し得ないかの如き見解も反駁されてゐた。蓋しラッサールが用ひたケルン＝ミンデン鐵道の例こそは新價值並に新資本

が他の方法を以ても發生し得る事を指摘するものだからである。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』二二二頁

即ち若し『ケルン＝ミンデン鐵道が眞に値打が上つた』と云ふ事、此の價值の騰貴が『交通の増加、經營費用の低減の結果、一言を以て云へば、社會的事情の結果である事を承認するならば、當然の歸結として又、社會的事情は價值構成の一要因、夫に伴ひ資本構成の一要因を成し而もその要因たるや啻に私經濟的意味に於てのみならず、國民經濟的意味に於ても要因たる事をも認めざるを得ないであらう。蓋し、苟も新價值の發生と結び附ける私的資本の發生と云ふ事は同時に社會的なる資本所有の増加をも意味する事は明であるからである。

併しさうすると、ラッサールがその嚴格な信奉者であつた勞働價值説は全で顛覆せられて了つただらう。蓋しラッサールの云ふが如くんば、吾々は勞働以外に價值構成の要因、社會的事情の要因を持つたであらうから。

此の、ラッサール自身彼の價值論に加へた破綻が彼に分らない譯はなかつた、そこで彼は、ケルン＝ミンデン鐵道の場合に於ける新しい資本價值は併し結局は『ケルン＝ミンデン鐵道の勞働者及びその他、是等の勞働と協力して同一結果に對して影響を及ぼした勞働者から作出されして……鐵道株式の所有者に讓渡されたのだ』と説明する事に由つて社會的事情に由る價值の發生を一般勞働價值論と一致せしめやうと企てた。(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一二二頁

ケルン＝ミンデン鐵道の價值騰貴を勞働價值論の立場から説明して見すべき筈のラッサールの此の註釋は、併し、いつまでも勞働價值論の忠實な遵奉者たらんとし、凡て新價值の發生は結局どうかして價值の唯一の源泉としての人間勞働に還元せんとするラッサールの善良なる意志より以外には何者も見せて呉れない。何故なら、此の註釋が夫より以外何を意味してゐるのであらうか。吾人は夫

に由つて、既に述べた如く、ケルン＝ミンデン鐵道の價值騰貴の結果だつた夫の新しい資本構成がケルン＝ミンデン鐵道の労働者とどんな關係にあるのか、かと云つて又爾餘の労働者の群を何と解すべきか知る由も無い。それに又『同じ結果に影響を及ぼした』と云ふ言葉も曖昧である。『同じ結果』を新價値の作出と解すべきか、或はその結果が初めて新價値の發生となつた社會的事情の生起に對する労働者の影響と解すべきか。總て是等の問題に對する回答は之を求めても徒勞である。

全註釋は一般にラッサールに由つて餘に曖昧、不明瞭に把握されてゐるので、こんな疑念さへ浮んで來るのである。即ち斯の曖昧さは、著者自らが、斯の如き如何なる場合にも容易ならぬ問題は、之を如何に解すれば、一方に於ては諸々の事實を斟酌すると共に、他方に於ては労働價値説も亦無難に確保し得るであらうかと云ふ事に就て毫も明識してゐなかつた事實の結果ではなからうか。

併し斯の如き臆測が根據のない事はラッサールの最一つの文句が之を指し示してゐる。二一八頁に於てラッサール曰はく『種々様々の社會的事情及び夫に由つて決定された交換價値に由つて』『刻々社會に於ける余のものと汝のものが變化し、一切の個人的所有が新に分配せられる』と。吾々は此のラッサールの言葉の中に、再び、嚮に吾人が力説強調した同じ矛盾に逢着する。一方では彼は社會的事情は交換價値に『決定的に』影響すると云ひ、他方では社會的事情は單に『社會に於ける一切の余のものと汝のものとを變化する』分配要因に外ならないと説明する。

斯の如き説明に包含されてゐる矛盾は明々白々である。何故かと云ふに、社會的事情は交換價値に對して『決定的に』影響する即ち商品の交換價値をその事情に應じて高めたり、低くめたりする事が出來ると云ふのが正しいならば、社會的事情は當に分配要素である許りでなく、價値要素である。之に反して、價値の唯一

の要素は人間労働にして社會的事情は單に分配要素として役立つに過ぎぬと假定するならば、後者は成程價格に影響するかも知れぬが、價值に對して決定的に作用する事は不可能である。

社會的事情てふ問題に關するラッサールの説明に於ける斯の如き矛盾、斯の如き曖昧及び漠然性の原因は、ラッサールが一方に於ては労働價值論の熱烈なる遵奉者であり乍、併し經濟の領域に於ては何等マルクスの如き深き思想家でないの労働價值説を徹底して考へる事が出來ず、従つて労働價值説の立場から一切の此説に對立せしめらるゝ難問を説明する事が出來ないと云ふにある。

ラッサールは、財貨はその生産により多量の間労働が費されなくても、その價值が増進する如く見ゆる場合がある事、此の如き價值騰貴の原因は社會的事情であると云ふ事實に注意しない譯に行かなかつた。従つて彼には後者が事實上新しい價值を作出し、財貨の交換價值に『決定的に』作用すると思はれたのだ。併し

他方彼は労働價值説の信奉者として、價值は労働に由つてしか作出され得ない事を看過し得なかつたので、社會的事情の役割を單なる分配要因に還元しやうと企てたのだ。

マルクスが此の難問を労働價值説の立場から如何に解決したかは、遍く知られてゐる。マルクスは、實際に於て財貨の價值は社會的事情の爲に、夫が比較的多量なる人間労働を表はさなくとも騰貴し得る事を否定しはしなかつた、が彼は同時に明白に、斯の如き、社會的事情に由つて増進せる價值は何等眞實の價值ではなく、單に擬制的なる、幻想的なる價值なる事を證明した。マルクスに従へば、資本主義社會に於て世人が凡て資本を利子を産む資本と見做す事になれて來るに於ては、人々は知らず凡て經常的なる収入は當時の平均利率に由つて計算された資本の利子と見るのである。そこで、例へば株式、有價證券等經常的收益に對する要求を代表するものは、夫が實際表はしてゐる資本價值に頓着なく、代表

せられてゐる収益の多寡及び既存利率の高低に應じて、事實上の資本價值より高かつたり低かつたりする一種獨特の資本價值を持つ事になる。斯の如き資本價值は事實上の資本價值とは區別せられる獨立の運動を持つており、完全に社會的事情に左右されるものである。

併し斯の如き資本價值の特に著しき特徴は又夫が單なる幻想的なる資本價值である、即ち「常に資本化されるより外なき収益、換言すれば」、事實上の資本價值と何等の關係なき『現存の利率に應じて幻想的資本に換算せらるゝ収益である』事である。(註)

(註) 『資本論』第三卷第二冊五頁

此のマルクスの言説を念頭に置いておけば、ラッサールが引用した土地とケルン・ミンデン鐵道の場合が勞働價值説の立場から如何に解決せらるべきかは明白である。

第二の場合と同じく第一の場合に於ても、價值の騰貴を促したものは社會的事情であると云ふ事は正しいが、併し如何なる價值であるか。事實上の價值ではなくして單に幻想的なる價值の騰貴である。穀物に對する需要が増進した爲に、より確なる耕地も耕作せられねばならなかつた。夫が穀物の騰貴を促し、夫と同時に又豊饒なる土地の地代の騰貴も促した。土地の斯の如き、地代に具體化せられた經常的収益は今や資本化せられて、該土地そのもの、資本價值と見做される——尤も夫は、さうでなければ、人間勞働の生産物ではないから何等の價值も持たないが。併し地代の高低は社會的事情に由つて決定せらるゝが故に、従つて資本化せられた地代に外ならぬ所の該土地の『價值』も斯の如き社會的事情に由つて決定せられるのである。とは云へ、斯の如きは、以上述べた所に従へば、所謂勞働價值説を損ふものではない、蓋し斯の如き社會的事情に由つて決定せられた價值は全く毫も眞實のものではなくして、幻想的、擬制的のものなるが故であ

る。

そして之はケルンミンデン鐵道の株式に就ても同様である。種々なる『社會的事情』の爲に、株式の配當は徐々に五パーセントから一三パーセントに増した。一三パーセントと云ふ比較的高率の配當の資本化は勿論資本そのもの、比較的高き資本價值を生ずる、併し其の如き資本價值は又矢張り鐵道の設備及び經營手段に具體化されてゐる事實上の資本價值とは何等の關係なき擬制的、幻想的資本價值に過ぎない。

何れの場合にも、土地の場合にも同じくケルンミンデン鐵道の場合にも、斯くてマルクスに従へば何等新しい價值は發生しなかつたであらう。社會的事情に由つて、その實際的價值とは嚴密に區別せらるゝ所の是等商品の擬制的價值が騰貴せしめられたに過ぎない。

之に由つて是を觀るに社會的事情なるものがマルクスの經濟的體系に於て演ず

る役割は自ら明である。社會的事情に由つて齎される價值は擬制的性質のものなるが故に、社會的事情は單に一國に既存の價值が更に新に分配せられ、夫が一方の資本家から他方の資本家の手に讓渡せらるゝに貢獻するに過ぎない。一言を以て之を云へば、社會的事情とは分配要因に外ならないのである。

と云つても斯の如き論斷は、マルクスと共に、社會的事情に由つて齎された價值は單に幻想的性質のものであると云ふ事を承認して初めて論理的であり、一貫するのである。之に反して一方では社會的事情を單なる分配要因と見ながら、他方では夫に由つて齎された價值を有効に、そして眞實に發生した新しき資本價值と見る事は非論理的であり、撞着である。何故かと云へば、ラッサールが考へた如く、ケルンミンデン鐵道の場合、『新しく發生した資本價值が有効にして眞實なるもの』であり、社會的事情に由つてケルンミンデン鐵道は『現實に價值が増した』と云ふ事が正しいならば、社會的事情は分配要因である許りでなく、價值

要因でもある、そして労働が唯一の價值構成要因であるとする労働價值説遵奉者の主張は毫も論理的基礎附けを必要としない事になる、蓋し然る時は吾々は全く一つではなく、價值の二個の源泉、労働と社會的事情を持つであらうからである。ラッサールはシュルツェーリッチを以て或時は労働のみを他の時は又節約も資本の源泉と爲すと批難した。『斯くて今や吾々は資本構成に就て二個の要因をさへ獲得しさうな様子である』とラッサールは驚いて叫んでゐる。(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷九八頁

而もラッサールは同じ批難が彼に對しても容易に擧げらるゝであらう事を氣附かなかつた。

惟ふに當にマルクス價值論の信奉者のみならず、労働價值論の信奉者も容易に労働價值論者としてのラッサールに全然満足しない理由を充分持つであらう。

第六章 ラッサールの理想主義(マルクス の價值定義誤解の主因)

ラッサールが、マルクス價值論は充分に判つてゐたに不拘、古典的國民經濟學の古き誤謬に陥り、商品に含まれた労働の二重性を夫から結果する一切の論斷と共に看過した事に對する理由は、——此の點に於て吾人はフランツ・メーリンクと完全に一致するが——吾人の見る所に據れば、マルクスとラッサールとの間に一般に存する深刻なる區別、唯物論的觀方と理想主義的觀方との區別に求めらるべきである。惟ふに、マルクスは唯物論者として何等か主觀的な、理想主義的目的を設けて自己の研究を限定する事なく、自己の經濟的研究を以て、社會の經濟的生活の眞の內面的法則を客觀的に見出さんとする、只一つの目的を追進したに對して、理想主義者ラッサールに取つて彼の目的たる社會主義的社會秩序の實現

——尤も彼は夫のみに人類救済の期待を懸けてゐたのだが——は豫め與へられておつて、彼の一切の經濟學説は、彼に取つては、従つて、彼が此の理想實現の爲に據つて以て議論と手段とを創造する貯水池に過ぎなかつた。

故に、若しラッサールが、マルクスの如く、その理想を先づ人間社會の經濟的發達の客觀的法則から抽き出す事をせず、是等の經濟的法則そのものを屢々彼の理想に應じて形成せしめたとして、然らすとするも、精々夫等の法則から希望せられた論斷が下し得らるゝに必要なりし程度しか是等の法則の展開を追進しなかつたとして、何等驚くを須ひぬであらう。

之と關聯して、何故にラッサールがその過去の記述に於てはいみじくも唯物論に忠實であり乍、現在及び未來の研究に近づくけば近づく程愈々益々彼の理想主義を反復力説するかてふ事實も亦説明せられるのである。即ち彼は彼の理想の實現を想へば想ふ程、益々經濟的發達の緩慢なる歩みに慊らす感じ、益々激しく、

人間に對して人爲的に歴史的過程に干涉する能力を賦與するが如き歴史觀に隱場を求めたのである。

斯くて、成程ラッサールは中世に於ける貴族と僧侶の支配をば斷乎として『中世の經濟的特徴』『その生産状態』(註一)に歸し、市民的階級の勢力の伸暢を、彼が表見上革命的なる農民戰爭を排して『現實にそして眞に革命的なる』(註二)運動と呼んだ産業の進歩から説明し夫に照應して機械の發明も『夫自體』(註三)一の革命であるとしたが、無産階級が權力を求めて起つた歴史時代の記述に來ると忽ちにして此の純唯物論的立場を棄て、了ふに至るのである。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第二卷一〇頁

(註二) 同 一五頁

(註三) 同 二〇頁

茲ではラッサールは最早諸階級の支配關係に於ける斯の如き必然的なる變化の

經濟的背景を見せて呉れない。茲では彼は最早や前と同じ精密さを以て、嘗つて中世に於ける貴族及び僧侶の優越的地位及び近代に於ける市民階級の優越的地位を基礎附けたと同様の自然必然性を以て無産階級の擡頭に導くべき筈の經濟的發展の法則を追求しない。

經濟的發展の過程はラッサールには餘りに緩漫に思はれたので、彼は人間社會の經濟的轉換に彼の未來の理想の實現をも投げ懸けて了ふ事は出来なかつたのであらう。そこで彼は歴史建設の新要素を求めて之を抽象的理念の形態即國家形態に得たのである。

國家はマルクスを以てすれば、單に社會の事實上存在する經濟的關係の外部的政治的表現であり従つて後者に從屬するものであつたものが、ラッサールには一の獨立せる、社會から獨立せる、社會に優越さへせる歷史的發展の要因となつた。

ラッサールは國家に對して「人類の幸福を積極的伸展と進歩して止まぬ發達に齎し、人類の自由への教育と助長」(註)を完全する職能を歸着せしめ、そして爾後此の國家を以て彼の經濟的理想、社會主義の出發點とした。

(註) 『ラッサール講演及び論文第二卷四八頁』

其處に於ける上級階級の政治的優越は當該社會に於ける彼等の經濟的優越の所産であつた所の封建的及び特權ある市民的國家と反對に、近世の、普通選舉權上に築かれた國家は數的に優越なる勞働階級の政治的優越を彼等の經濟的解放の出發點とすべきであつた。

ラッサールが國家に由る社會主義の徐なる實現——國家の信用を受くる勞働者の生産組合の建設に由つてする——を考へた方法は餘りに知られ過ぎた方法に過ぎない。

ラッサールは唯物論的研究方法を輕んじはしなかつた、彼は夫が彼の目的に適

ふ場合は夫を利用した、併し夫が煩はしくなると、おさらばを極めこむことをちつとも躊躇しなかつた。

そして之が一般にラッサールの經濟的研究の最も著しき特徴である、その經濟的研究は、既に述べて置いた如く、彼が夫から彼の豫て定立せる理想の手段及び議論を創造した貯水池の役目を勤めたに過ぎない。

併し夫が爲にラッサールの經濟的研究は抑もから狭く限定されてゐたとして之は彼の價值論に影響せずにはゐなかつた。マルクスにとつて彼の價值論は全資本主義的經濟秩序の謎を解く手段、——メーリンクの言葉を藉れば——『宛も資本主義社會を社會主義社會へ轉換せずに置かぬ世界歴史的過程の如くに、據つて以て價值構成及び剩餘價值構成が研究せられた指南車であつたが、ラッサールは價值論を以て單に私有財産の撤廢、及び新に勞働の上に建設された財産形態創設の必然性に對する倫理的基礎附けと解した。

斯の如き狹隘なる立場から出發する時、ラッサールがマルクス價值論の意味と射程とに對して何等の理解を持ち得なかつたのは當然自明であつた。斯の如き價值論が私有財産の撤廢の倫理的基礎附けとなるが爲には、ラッサールは夫から僅に二點を擇り出せば充分である。即ち一は勞働を一切の價值の唯一の源泉と呼ぶことである。蓋し勞働を作出する者が單に勞働のみであるならば、勞働をする勞働者のみが價值を作出し従つて此の價值の享受者であらねばならぬことは自然の歸結であるからである。そして第二には、價值構成的勞働の普遍的に社會的なる勞働の定義である、蓋し斯の如き價值構成的勞働の定義に基づけば益々大なる確さを以て共同なる分配の必然性が引き出されたからである。

商品の價值を成すものが一般に社會的なる勞働の具體化であるならば、斯の如き社會的勞働の成果は正當には個々人に由つて獨占されるを許さない、必ず生産物の成立に貢獻した總べての人々に共通に分配せられねばならない。換言すれ

ば、今日の生産の社會的特徴は生産者の間に生産物の社會的分配をも要求する。その他の如何なる分配も人間の正義の意識に逆はざるを得ない。

ラッサールに曰はく「現在の社會的勞働は、全く壓倒的に、獨立なる活動の並び行はれる漫然たる動きではなく、同じ生産物の作出の爲に多數者の嚴密に相互に交錯せる共同社會的結合である」(註)所で生産は今日既に「共同なる、協力的なる」生産なるに反し、分配ディストリビューション(生産された生産物の分配)は——之が現今社會の根本矛盾の一であるが——何等共同でなく、個人的である、即ち、生産物は營に客體として許りでなくその價值から云つても企業家の個人的所有に移るのであつて、而も企業家は其の財産を彼一個の利得の爲に利用するのに、全ての該生産物の成立に協力した勞働者は、その勞働收益の一部分を損失し、賃銀則に従つて搾取されるのである。

(註)『ラツツァール講演及び論文集』第三卷五九頁

「斯の如き既に今日存在する生産の共同性と此の如き分配に於ける最も甚だしき個人主義とは」——ラッサールは直ぐ續けて曰ふ——「之こそ、夫に由つて現代の人間社會の「勞働が眞に、その遂行の形式と態様を決定される」所の、そして或る人間をして「人類社會」から即ち人類共同社會から斯く多量の效用を、他の人間をして斯く少量の效用を享受せしむるに至つた所の深刻なる矛盾である」(註)

斯の如き状態が不當であり、従つて變革せられねばならぬ事は、ラッサールに従へば、何等疑を挟む餘地はあり得ない。問題は偏へに、個々人或は全階級が社會的生産物を彼等の個人的所有たらしめる權力を所持する現象の原因を闡明し夫が艾除の適當なる手段を見出すにある。

此の問題の精密なる研究の結果、ラッサールは今や、實に、生産に必要な前拂が資本家階級の個人的所有であるてふ事情こそは斯の如き原因と見做すべきものであるとの確信に達した。如何にも法律上は自由であるが、經濟上隸屬せる勞

働者が彼等の唯一の財産たる彼等の労働力を資本の所有者に賣却するの餘儀なきに至らしめらるゝのは生産手段の私有である、そして今や市場に於ける商品労働力の販賣は他の商品の販賣と同じ様に行はるゝが故に——蓋し「市場で賣らるゝものは凡て市場にとつては無差別平等なるが故である。市場は唯一の尺度と唯一の良心を有するに過ぎない。即ち需要と供給之である、尤も夫の關係は結局必要なる生産費用で決定されるが」(註一)——労働者はその商品、彼等の労働力に對して此の商品の生産に必要な費用以上を貰はない、或は換言すれば、一般慣習的に必要な生計費以上を得ないのである。労働收益の此の普通に必要なる生計費を超へた餘剰は盡く資本家の懐に入り彼等にとつて所謂資本利潤を形成する。斯くて資本利潤は「労働者の労働收益の控除」(註二)に外ならないのである、尤も夫は生産手段が個々人の掌中に在る事に由つて初めて可能なものではあるが。若し假に此の生産前拂ひが直接労働者の自由になつたならば、彼等はその労働收益の一

部分を企業家階級に譲り渡さしめらるゝ事はないであらう。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷一九六頁

(註二) 同一三八頁

即ち「誰れでもが、彼の労働の生産物でもないものを簡單に彼のものと呼ぶ」

(註) が如き社會的なる財産状態を出來上らしめたのは、實に此の労働者と彼の労働手段との分離である。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷二一六頁

常に労働者階級と資本家階級との間許りでなく、資本家階級そのものの中にも純然たる偶然に由つて決定された無政府的所有の分配が支配してゐる。

「トルコやメキシコに於ける一寸した出來事が起つても、戦争や媾和があつても、常に戦争や媾和の爲許りでなく、アツ違ふ……一寸「輿論」が巷に擴がつても、新聞記者の一寸したお喋言やつまらぬ虚電が入つても、パリ乃至ロンドンに

一寸公債が現はれても、ミシシッピー沿岸の穀物の收穫に由つても、濠洲に於ける金鑛に由つても——要するに、凡ての客觀的出來事に由つて、その政治的領域に於けると財政的領域に於けると商業的領域に於けるとその他何に於けるとを問はず、斯の如き社會の明白に純客觀的なる運動に由つて日々取引所に於ては個人的余のものと汝のものとが決定され確定されるのである』(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集』二一七—二一八頁

然らば斯の如き現象の理由は如何。夫はラッサールに従へばいつでも次の事に求むる外はない、即ち經濟的領域は社會的關係の領域即ち『連帶或は共同の領域』(註一)であるに反し、斯の如き共同性の結果は萬人の共同體に由つて負擔せられずして個々人に由つて負擔せられねばならぬと云ふ事に求めるより外はない。その結果は勿論、『資本家社會そのもの、内部でさへ各人は彼のしなかつた事にも責任を負はねばならぬのである。單純なる勝負事となつた生産状態は資本家と

云ふ人間とボールをするのである』(註二)而も勞働が自己の使用の爲にする效用價値の生産に向けらるゝ事少なければ少い程、社會的交換價値の生産に向けらるゝ事大なれば大なる程、益々夫は著しくなるのである。併し資本主義的社會に於ては、生産の主たる標識が正しく、殆んど排他的に交換價値の生産にあるが故に、唯一つの原則『財産は他人のもの』(註三)が行はれるのみである。

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷四二頁

(註二) 同二一六頁

(註三) 同二一七頁

今若し此の如き原則『財産は他人のもの』を止揚し、事實上『個人的なる所有勞働に基づく所有』(註)を創設せんと欲するならば、此の如き所有状態の原因が一旦認識せられたならば之を艾除する様に努めなければならぬ。之に對する手段は自ら明である。

(註) 『ラッサール講演及び論文集』二一八頁

『分勞は既に夫自體共同なる勞働、生産の社會的結合である。之は生産自體既に有るが儘に置かるれば足りる。即ち共同の生産に於て個人的生産前貸——夫から生産収益を企業家に委譲して、生計を超ゆる一切の生産剩餘の企業家への譲渡が起るのであるが——を止揚し、さなきだに社會の共同なる勞働をそこで社會の共同なる前貸を以て經營し、生産の収益を生産に貢獻した一切の人間に斯の如き彼等の貢獻の尺度に應じて分配すれば足りるのである』(註)

(註) 『ラッサール講演及び論文集第三卷』二一九—二二〇頁

夫に對する過渡手段としては而も『最も容易にして穩健なる過渡手段』としては、ラッサールに従へば『國家の信用を有する勞働者の生産組合』(註二)が役立つべきだつた。斯の組合は、假令『一旦發生せる資本所有』は然らすとするも、尠くとも『此の未來の未だ人々の習熟せぬ所有をば、生産の別個の形式を通じて勞働

所有に形成せしむるに至らしむべきであつた』(註二)

(註一) 『ラッサール講演及び論文集』第三卷二二〇頁

(註二) 同二一九頁

斯くてラッサールは、生産物の既存の分配方法は不當であり且つその然る所以、夫に代つて生産物の社會的分配の起らざるを得ざるべき所以を證明した。そして最後に彼は又、由つて以て舊來の分配方法が撤廢せられ、新規の生産方法が創められるであらう手段をも指示した。そして總て是等の重要な、然りラッサール自身を以てすれば恐らく最も重要な言説の基礎を爲したものは、既に述べた如く、商品を生産する勞働の如き、近代的生産の社會的特徴の引證であつた。そして今やラッサールが何故にマルクスの價值構成的勞働の一般に社會的なる勞働としての定義をば、彼はマルクスがその中にどんな内容を盛つたのか必しも明識しなかつたにも不拘、左様に極端に首肯したか、判る。と云ふのは、斯の如き價值

構成的勞働の定義は、ラッサールには、今斯の勞働が抽象的人間勞働を意味しやうが、或は現實の勞働を意味しやうが、勞働の二重性が顧慮せられやうがされまいが、等々に頓着なく同じ様に役に立つたのであつた。委べて是等の問題は、獨り唯物論者マルクスにとつてのみ重大であつた、蓋し彼にとつては彼の價值論は複雑なる經濟的全構造の基礎であつたからであつた、併しラッサールに取つてはさうでなかつた。蓋し彼はその價值論に於て私有財産撤廢の倫理的基礎附け以外の何もも見なかつたからである。何故かと云ふに、マルクスの價值に關する普遍的に社會的なる勞働の具體化としての定義は斯の如き倫理的基礎附けとして彼の役に立つたので、彼が此の社會的勞働の意味をマルクスの意味に於て解したか或は何等か他の意味に於て解したのかは頓着ないからであつた。彼にとつては事實上價值定義の形式のみが問題であるが内容は問題でなかつた。

ラッサールのマルクス價值論全幅の理解を妨げたものは實に一般に理想主義的世界觀及び特に價值論の理想主義的で觀方であつた。

此の演説者の雙びなき熱情、此の政治家の力と活躍、彼の人格の歴史的特質が根ざせる同じ思惟方法が此の研究者の不幸となつたのである。一方ラッサールの經濟的誤謬の中には又彼の人格の偉大さも潜んでゐるのである。即ち彼の哲學的思惟方法の統一的完足性、彼の偉大なる闘争目的に對する力強き感動、彼がその理想の爲に生命を捧げた偉大なる熱情が潜むのである。

大正十五年三月一日印刷
大正十五年三月五日發行
大正十五年四月一日再版



不許複製

特價品

正價金貳圓參拾錢

譯者 友岡久雄

發行兼印刷者 八坂淺次郎

印刷所 弘文堂印刷部

發行所
發賣元

京都市丸太町寺町東
區替穴阪一七〇五番
東京市神田區淡路町
二丁目四番地

弘文堂書房
弘文堂東京店

製本所弘文堂工場

嘉治隆一
後藤信夫 共著

マルクスとエンゲルス

正價金參圓參拾錢
送料金拾八錢

ホルハルト原著 田中九一譯

マルクス經濟學大綱

正價金貳圓五拾錢
送料金拾八錢

カウツキー原著 三輪壽壯譯

社會民主黨綱領解說

正價金參圓五拾錢
送料金拾八錢

以下續刊

弘文堂發行

8

27. 5. 13

